

漆山長表遺跡

発掘調査報告書

1998

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

うるし やま なが おもて

漆山長表遺跡

発掘調査報告書

平成10年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、漆山長表遺跡の調査成果をまとめたものです。

漆山長表遺跡は、山形市の北部、天童市と隣接する大字青柳に位置しています。水田の広がる農業地帯であったこの地域も、流通センターの建設に始まって山形県立保健医療短期大学の開校、更には県立中央病院の移転等と大きくその様相を変えつつあります。

この度、主要地方道山形天童線地方特定道路整備事業に伴い、工事に先立って漆山長表遺跡の発掘調査を実施しました。

調査では、古墳時代前期の竪穴住居跡、奈良・平安時代の掘立柱建物跡・竪穴住居跡・溝跡・畝状溝跡群などが検出され、土器や土錘、砥石など当時の生活を物語る貴重な資料を得ることができました。

近年、高速自動車道やバイパス、農業基盤整備事業など国県等の事業が増加していますが、これに伴い事業区域内で発掘調査を必要とする遺跡が増加の傾向にあります。これらの埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成10年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例　　言

1 本書は平成9年度主要地方道山形天童線地方特定道路整備事業に係る「漆山長表遺跡」の発掘調査報告書である。

2 調査は山形県土木部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。

3 調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名　　漆山長表遺跡 (C Y G U O) 遺跡番号 平成8年度新規登録

所　在　地　　山形県山形市大字青柳字長表2502

調　査　主　体　財団法人山形県埋蔵文化財センター

調　査　期　間　発掘調査 平成9年4月1日～平成10年3月31日

現地調査 平成9年5月7日～平成9年6月26日

調　査　担　当　者　調査第二課長 野尻 侃

主任調査研究員 尾形 與典

調査研究員 植松 晓彦(現場主任)

嘱託職員 高柳 健一

4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県山形建設事務所道路計画課、山形市教育委員会、東南村山教育事務所等の関係諸機関の協力を得た。また発掘調査にあたって、遺跡の微地形については阿子島 功氏(山形大学人文学部)からご指導を賜った。ここに記して感謝申し上げる。

5 本書の作成・執筆は、植松晓彦・高柳健一が担当した。編集は尾形與典・須賀井新人・菅原哲文・豊野潤子が担当し、全体については野尻 侃が監修した。

6 委託業務は下記の通りである。

遺構の写真測量・実測 株式会社パスコ

資料の理科学分析(土壤分析) パリノ・サーヴェイ株式会社

7 出土遺物・調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は次の通りである。

S T…豎穴住居跡 S B…掘立柱建物跡 S A…柱列 S K…土坑 S D…溝跡
S P…ピット S X…性格不明の落ち込み
E K…遺構内土坑 E B…遺構内柱跡 E A…遺構内柱跡 E L…遺構内炉跡
R P…土器・土製品 R Q…石製品 P…土器 S…石

2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。

3 報告書執筆基準は下記の通りである。

- (1) 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。
- (2) グリッドの南北軸は、N-10°30'-Eを測る。
- (3) 遺構実測図は1/60～1/200他の縮図で採録し、各々スケールを付した。なお、実測図中の焼土は砂目のスクリーントーンで表す。
- (4) 遺物実測図・拓影図は、原則的に1/2、1/3、1/4で採録し、おのおのスケールを付した。なお、土師器は断面白抜き、須恵器は黒ドット、赤焼土器は白抜きドットを各々断面右下に付した。
- (5) 遺物観察表中の計測値欄は現存値を示す。出土地点欄の層位では「F」は遺構覆土内出土、「Y」は遺構底面出土を各示し、ローマ数字「I～IV」等は遺構を覆う土層(基本層序)を表している。
- (6) 遺物図版については、1/3を基本とし、一部任意の縮尺とした。
- (7) 遺物番号は、遺物実測図・遺物観察表・遺物図版ともに共通したものである。遺構挿図中に図示している遺物も同様である。
- (8) 遺構覆土の色調については、1987年度農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帳」に拠った。

目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
III 遺跡の概観	
1 遺跡の層序	7
2 遺構と遺物の分布	7
IV 検出された遺構	
1 掘立柱建物跡	8
2 竪穴住居跡	14
3 溝跡	16
4 畝状溝跡群	16
5 落ち込み状遺構	16
V 出土した遺物	
1 土器	18
2 土製品・石製品・古銭	26
VI まとめと考察	
1 調査のまとめ	29
2 考察	31
報告書抄録	32
付編	巻末
「漆山長表遺跡の自然科学分析」	

表

表1 出土遺物観察表(1)	27
表2 出土遺物観察表(2)	28

挿 図

第1図 遺跡位置図	2	第10図 S T 2・3 竪穴住居跡	15
第2図 調査概要図	3	第11図 溝跡・畝状溝跡・落込み遺構	17
第3図 遺跡周辺微地形図	3	第12図 遺物実測図(1)	20
第4図 遺構配置図	5	第13図 遺物実測図(2)	21
第5図 基本層序	7	第14図 遺物実測図(3)	22
第6図 S B 1 掘立柱建物跡	9	第15図 遺物実測図(4)	23
第7図 S B 5・10掘立柱建物跡	10	第16図 遺物実測図(5)	24
第8図 S B 6・16・131掘立柱建物跡	11	第17図 遺物実測図(6)	25
第9図 S B 124・132掘立柱建物跡	13	第18図 漆山長表遺跡出土坏類分類図	30

図 版

図版1 遺跡遠景・近景	図版7 溝跡・畝状溝跡・落込み遺構他
図版2 S B 1 完掘状況他	図版8 出土土器(1)
図版3 S B 5・10完掘状況他	図版9 出土土器(2)
図版4 S B 6・16・131・124・132完掘状況他	図版10 出土土器(3)
図版5 S T 3 完掘状況他	図版11 出土土器(4)
図版6 S T 2 完掘状況他	

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

漆山長表遺跡は、山形市北東部の青柳地区に位置し、村山高瀬川と立谷川に挟まれた水田地帯に立地する。周辺には県立中央病院移転整備事業及び健康の森整備事業に伴い、平成7年度に発掘調査が実施された古墳時代の下柳A遺跡や、平成8年度に調査された縄文時代末～弥生時代の北柳1・2遺跡が位置し、遺跡の多い地域として知られている。

今回の発掘調査は、主要地方道山形天童線地方特定道路整備事業に伴って実施されたものである。

本遺跡は、同事業に係る平成8年度遺跡詳細分布調査によって遺跡の存在が確認され、平成8年11月に、県教育委員会による路線区内の試掘調査が行われた。

試掘調査では平安時代と考えられる柱穴・土坑・溝跡などの遺構や、土師器・須恵器・赤焼土器・中世陶器・箸などの遺物が検出された。その結果、東西180m（路線外は未調査により推定）、南北90mの分布範囲を呈する集落跡であることを確認、平成8年度新規発見遺跡として登録された。

調査結果をもとに関係機関による協議が行われた結果、主要地方道山形天童線地方特定道路整備事業区内について緊急発掘調査を実施して記録保存を図ることになり、財団法人山形県埋蔵文化財センターが県の委託を受けて発掘調査を実施することになったものである。

2 調査の方法と経過

発掘調査は、平成9年5月7日から6月26日までの実質37日間で実施した。調査面積は、約16,200m²の遺跡範囲のうち、主要地方道山形天童線地方特定道路整備事業に係わる2,800m²である。

5月7日に発掘器材の搬入、鋤入れ式を行う。調査区は調査の便宜上、調査区内を東西に流れる用水路を境にして北側1,750m²を北区、南側1,050m²を南区とする。遺構検出面の深さ等を確認するために試掘を行い、12日から重機を用いて表土を除去し、北区より面整理を行った。

調査区を覆う座標は、調査区の中央を南北に走る主要地方道山形天童線の建設予定道路内の中央を南北に走るセンター用測量杭を南北軸の基準とし、それと直交する線を東西軸とした。これを起点として5m四方の方眼(グリッド)を設定した。東西軸は西から東にA～Iまで、南北軸は南から北に0～19まで付番して「A-1」のように表記した。

方眼の南北軸は、N-10°30'-Eを測る。

調査は、表土除去終了後北区から開始し、面整理を繰り返しながら遺構検出・マーキング・遺構登録・遺構精査を行った。遺構の精査に合わせ、遺構の平面図・断面図の作成、遺物の検出および登録、写真撮影、土層注記等記録作業、遺物取り上げ等を行った。7月25日空撮による写真測量を行った。

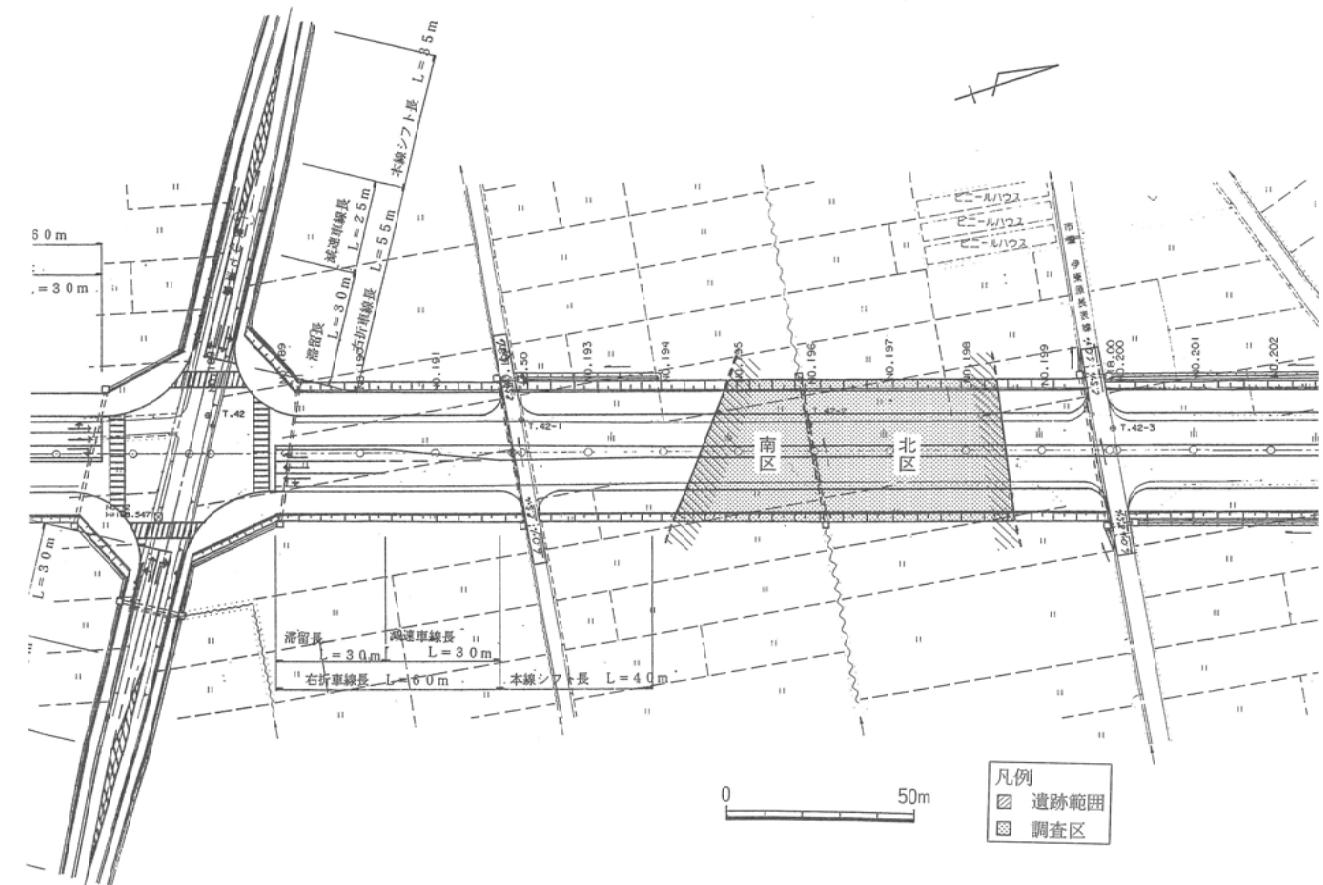
7月20日、関係者を含め多数の市民の参加を得て、現地説明会を開催し、7月26日現地事務所の撤収を行って、現地調査を終了した。

調査の経緯

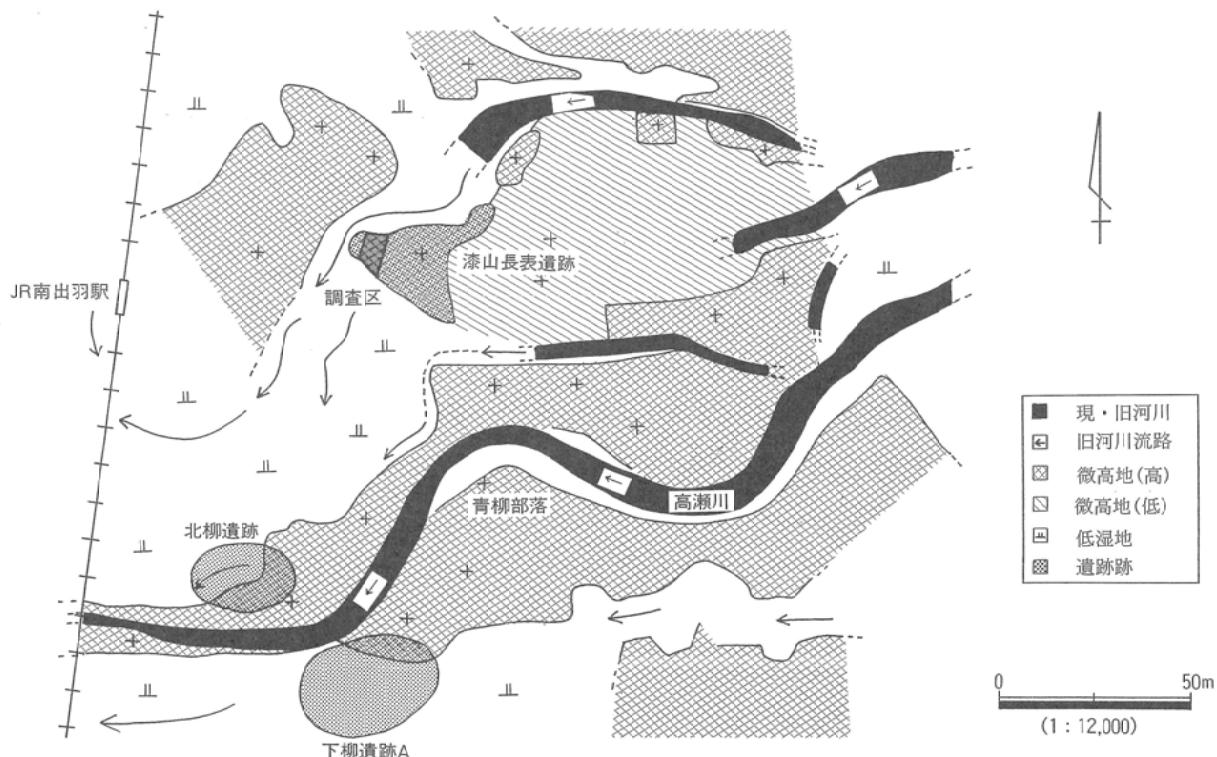


- | | | | | | |
|----------------|---------------|------------------|---------------|----------------|----------------|
| 1 漆山長表(奈良・平安) | 2 北柳1(弥生) | 3 大明神(奈良・平安) | 4 下柳A(古墳) | 5 下柳C(奈良・平安) | 6 一本柳B(奈良・平安) |
| 7 寺西(奈良・平安) | 8 漆山(弥生) | 9 衛守塚2号(古墳)▲ | 10 衛守塚(古墳) | 11 衛守塚4号(古墳)▲ | 12 北海上B(奈良・平安) |
| 13 中野(古墳) | 14 天神(奈良・平安) | 15 七浦(狐山)2号(古墳)▲ | 16 七浦(弥生) | 17 七浦(狐山)(古墳)▲ | 18 境田A(奈良・平安) |
| 19 境田B(奈良・平安) | 20 境田C(奈良・平安) | 21 境田C'(奈良・平安) | 22 境田D(奈良・平安) | 23 服部(奈良・平安) | 24 今塚(古墳) |
| 25 河原田(平安) | 26 鴨(古墳) | 27 江俣(弥生) | 28 桜葉の木(古墳) | 29 川原田(古墳) | 30 宮町(古墳)▲ |
| 31 山形三小(奈良・平安) | 32 お花山(古墳)▲ | 33 大野目(奈良・平安) | | | |
- ▲…古墳墓を示す

第1図 遺跡位置図 (S=1:50,000)



第2図 遺跡概要図 ($S=1:2000$)



(微地形区分は山形大学人文学部阿子島功氏の御教示による)

第3図 遺跡周辺微地形図 ($S=1:12,000$)

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

漆山長表遺跡は、山形市の北部、天童市に近接した山形市大字青柳字長表に所在する。JR 奥羽本線・南出羽駅の東約400mの水田中にあり、標高は約109mを測る。

この付近は、奥羽山脈の面白山に源を発して西流し、須川に注ぐ立谷川と立谷川の南を西流して馬見ヶ崎川に注ぐ村山高瀬川との2つの河川によって形成された、複合扇状地の扇端部に当たる。現在は、人為的な変化を受け、平坦化された水田地帯と1本の河道に落ち着いている高瀬川であるが、明治34年の地図(大日本帝国陸地測量部／2万分の1)では、北側に幾本かの支流が見られ、現在の航空写真でも旧河道が観察される。

のことから、この地域は、高瀬川が扇状地の常で度重なる氾濫を繰り返し、幾度となく河道を変え、また氾濫によって上流から運ばれたと考えられる土砂などが堆積して地形が作られたことが窺われる。

現在の青柳の集落や近接の北柳遺跡等は村山高瀬川の自然堤防上に立地しているが、本遺跡も河道の変遷の中で自然堤防が形成され集落が形成されたものと思われる。また、調査区では古墳時代と奈良・平安時代の遺構が地表下40cm未満の同一レベルで検出され、居住地として立地した地盤は比較的安定していたと判断される。時折襲う洪水が後背湿地に適度の肥料分を供給したものと思われ、生産基盤としては好条件を備えた地域だったと考えられる。

2 歴史的環境

本遺跡周辺には、立谷川扇状地や村山高瀬川扇状地の自然湧水の豊富な扇端部付近に遺跡が集中して立地している。本格的な稻作が営まれる弥生時代以降の遺跡は扇状地扇端部付近に多く見られ、低湿地を利用した水田経営に伴う平野部への進出という形で展開する。

本遺跡に近接する北柳1遺跡では縄文晚期終末～弥生中期初頭の土器が出土し、漆山遺跡で弥生中期のは榢形団式の土器、七浦遺跡では弥生後期の桜井I式の土器や石庖丁が、江俣遺跡では桜井II式の粒痕を持つ土器が出土する。

古墳時代に入ると今塚遺跡や嶋遺跡等の遺跡が数多く見られる。古墳前期の今塚遺跡では塩釜式の竪穴住居跡30軒、畝状遺構2群等が検出された。今塚遺跡の南には国指定遺跡「嶋遺跡」があり、古墳中～後期の南小泉II～栗田式に及ぶ農耕遺跡として知られている。近接の下柳A遺跡は竪穴住居跡が21軒検出され、南小泉II式の土器と若干の須恵器が出土している。また、6世紀から7世紀末に位置づけられるお花山古墳群、7世紀後半と見られる風間古墳、七浦古墳群等も近くに位置し、盛んな生産活動が行われていたものと考えられる。

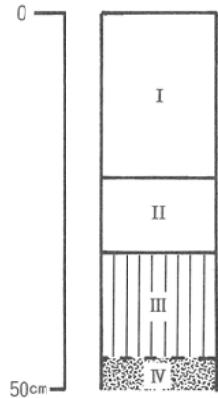
奈良・平安時代の遺跡は、本遺跡東側の村山高瀬川上流部の左岸地域には分布調査で数箇所存在が確認されている。本遺跡西側の村山高瀬川下流では、特に白川左岸で境田A・B・C・C'・D、見崎、天神、新井田の各遺跡が密に分布する。後背湿地を利用した水田経営が一段と安定したことを窺わせる。境田C・C'・D遺跡は、出土した遺物から9世紀から10世紀末に比定され、時期的に本遺跡に重なる遺跡と考えられる。



III 遺跡の概観

1 調査区と層序

今回の調査区の北・南区は、漆山長表遺跡の全体から見れば、東西に延びる遺跡範囲の西半部分に当たっている。両調査区の北区北東縁には粘土質から泥炭質の旧河道跡が東西に分布している。平成8年度に実施された試掘調査や周辺の地形などを含めて立地環境を概観すると、遺構の構築される安定した自然堤防(微砂層)が北区北東縁部に見られる旧河川跡に沿って併走していると理解され、本遺跡の範囲は概ねこの微砂層の広がる自然堤防の範囲と判断される。



第5図 遺跡層序

基本層序はI層が黒褐色の耕作土、II層が黒褐色粘質シルト層、III層が暗褐色微砂層(地山)、IV層が黒褐色粘質シルト～粘土層である。II層下部から遺物の包蔵が認められ、遺構の検出面はIII層直上面であった。柱穴等遺構の壁面状況や南区南西縁のトレーニング調査からIII層の微砂層は縦じて薄く広がる分布を示し一律の厚さでは堆積していない。これは自然堤防形成以前の低湿地(IV層の泥炭層)の凹部に河川の氾濫により土砂が運ばれ、III層を作り上げた結果といえよう。南区南西縁では検出面が削平を受けているが、III層直下のIV層泥炭層がほぼ遺構確認面と同レベルに表れ、遺跡等の立地に適さない状況を示している。遺構覆土は砂を含み遺構の埋没にも河川の氾濫が作用し、廃絶の一つの要因とも推測される。

2 遺構と遺物の分布

調査で検出された主な遺構は竪穴住居跡2軒、掘立柱建物跡7棟、柱列4基、溝・畝状溝跡30条、畝状遺構2条、ピット約90基等で、登録した数は132を越える。これらの遺構は時期的に古墳時代・平安時代に大別される。

古墳時代は南区南半部に竪穴住居跡が検出され、包含層出土の古墳時代の遺物もその周辺に限定され、調査区外南東部に広がる可能性が考えられる。

奈良・平安時代は本遺跡の主体を占めており、掘立柱建物跡を中心とした集落構成が窺える。掘立柱建物跡は、調査区の東半部に集中し多くは調査区外に続いたため、集落の主体が東方に広がることは明白である。建物跡はいずれも南北方向かそれに直交し、重複関係から3時期以上の変遷が認められ、出土遺物から奈良時代後半頃の「国分寺下層式」期があてられる。

建物跡の周辺は、建物跡と同方向にSD41・43等の溝跡が走行し、溝跡を挟んで西側に建物跡と同方向の数条の溝跡を一単位とする畝状溝跡群が分布する。

これらを概観すれば「微高地中央部の一番高い所に掘立柱建物を主とする居住域を構え、居住地域と生産地域(畝状溝群)を区画する溝が集落内を走行する」様子が窺える。

掘立柱建物跡群から外れて北区北西部に竪穴住居跡が1棟検出されたが、赤焼土器を主体とする出土遺物から建物跡群より新しい時期の所産であった。

出土遺物は土器が大半であり、遺構内からの出土は單発的で、多くは包含層からの出土である。包含層出土の傾向は北区東半部等に集中し、居住域等の分布との相関が強いと理解される。

IV 検出遺構

1 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡として確認出来たものは7棟である。このほかにも多くの小ピットを検出したが、積極的に建物跡とするまでには至らなかった。以下に各建物跡毎について概述する。

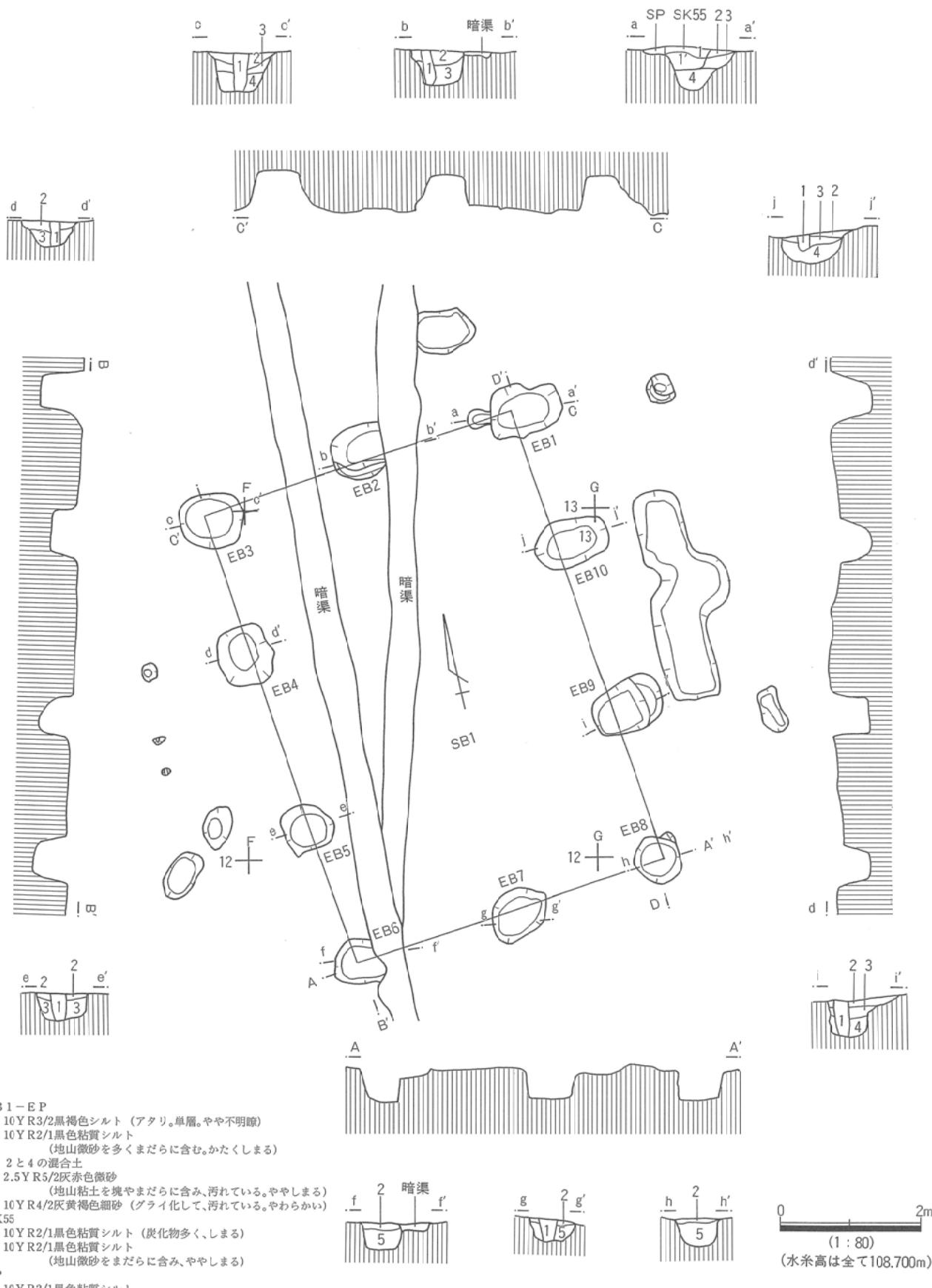
S B 1(第6図) 北区中央部F-12グリッド、III層上面で検出された。E P 6は暗渠に切られているが遺存状態は良好である。梁行4.6m(約15尺)、桁行6.6m(22尺)を測る2×3間規模の建物跡で、主軸方位はN-6°00'-Wである。柱間距離は210(7尺)~270cm(9尺)である。規模や掘り方が大きく、柱穴の掘り方は平面形が不整方形や楕円形を呈する。東面桁行では各々柱穴の長軸が、建物跡の主軸に対し直交して掘られている様子が窺えた。長軸で60~110cm、深さは確認面から30~55cmを測り、壁は垂直か傾斜し底面は平坦である。柱穴は地山の泥炭層を掘り込んで覆土をしているため、壁や底面が不明瞭で埋土に砂を含む事などから識別できた。なお、東面桁行の東側に幅70cm前後の幅広で浅いS D 14が近接し平走する。遺物は土師器甕、E P 1を切るS K 55からは「国分寺下層式」期の土師器坏が出土した。

S B 5(第7図) 北区東半部G~H-13~14グリッドのIII層上面で検出される。東側が調査区外に延びる。雨落溝や掘り方の切り合いから、S B 5がS B 10より古い事が分かる。梁行5.1(17尺)、桁行7.5m(25尺)を測る2×4間規模の南北棟で、主軸方位はN-3°00'-Eである。柱間は梁行250cm(約8尺)、桁行190cm(約6尺)前後である。S B 5は遺存状態が良く規模や掘り方が大きく、アタリも明瞭に検出された。掘り方は平面形が規格性のある隅丸長方形や方形で、柱穴の長軸は南北軸の桁に直交している。長軸90cm(3尺)前後、短軸60~80cm(約2尺)を測る。深さは30~55cmを測り、壁は垂直で底面も平坦で、断面形は長方形を呈する。S B 1と同様に西面桁行の西側に幅50cmの浅溝が建物跡に併走する。遺物は須恵器坏、壺や甕が出土した。

S B 10(第7図) 北区東半部G~H-13~14グリッドのIII層上面で検出され、東側が調査区外に延びる。梁行7.5m(25尺)、桁行3.9m(13尺)を測る2×4間の建物跡で、調査区外の東側に延びる可能性もある。主軸方位はN-2°00'-Wである。柱間は梁行200cm(約7尺)、桁行180cm(6尺)を測る。S B 10は柱穴の平面形が円形や楕円形を呈し、断面形も円形を基調とする。S B 5と比べて掘り方の規模が小さく浅く、アタリもやや不明瞭である。

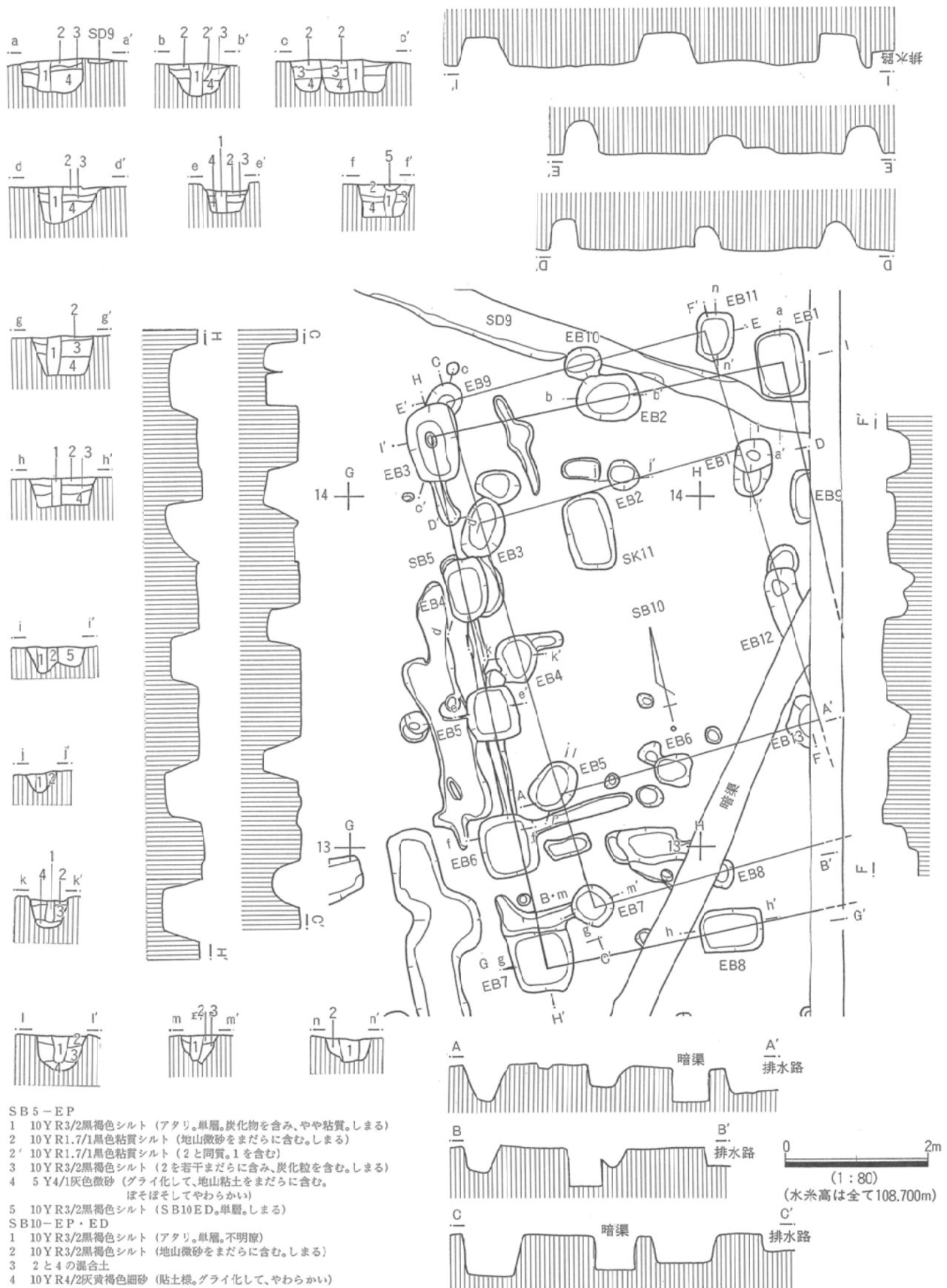
平面形が径45~90cm、深さは30~55cmを測り、隅柱は他の柱穴に比して深い傾向が窺えた。また、幅15cmの雨落溝が柱穴と約20cm間隔で西面桁行を主に併走し、E P 5の南側のS B 5 E P 6上面で直角に曲がり南面梁行に延びる。これらは雨落溝の区画外に位置する梁行南面E P 7・8等を増設した事が推測される。遺物は微弱な有段丸底の土師器坏等が出土している。

S B 6(第8図) 北区南東部G-11グリッドのIII層上面で検出され、南側を用水路にされている。S B 6がS A 8に切られ、S A 8がS A 17に切られる事から3時期の新旧が認められた。行4.5m(15尺)、桁行2.4m(8尺)以上を測り、2×1間以上で南に延びる建物跡で、主軸方位はN-2°00'-Wである。柱間は梁行・桁行210cm(7尺)前後である。掘り方は平面形が不整方形や楕円形を呈し、径は50cm前後を測り、深さは28~45cmを測る。壁はやや緩やかな立ち上がりの掘り方で、底面は平坦である。出土遺物は認められない。

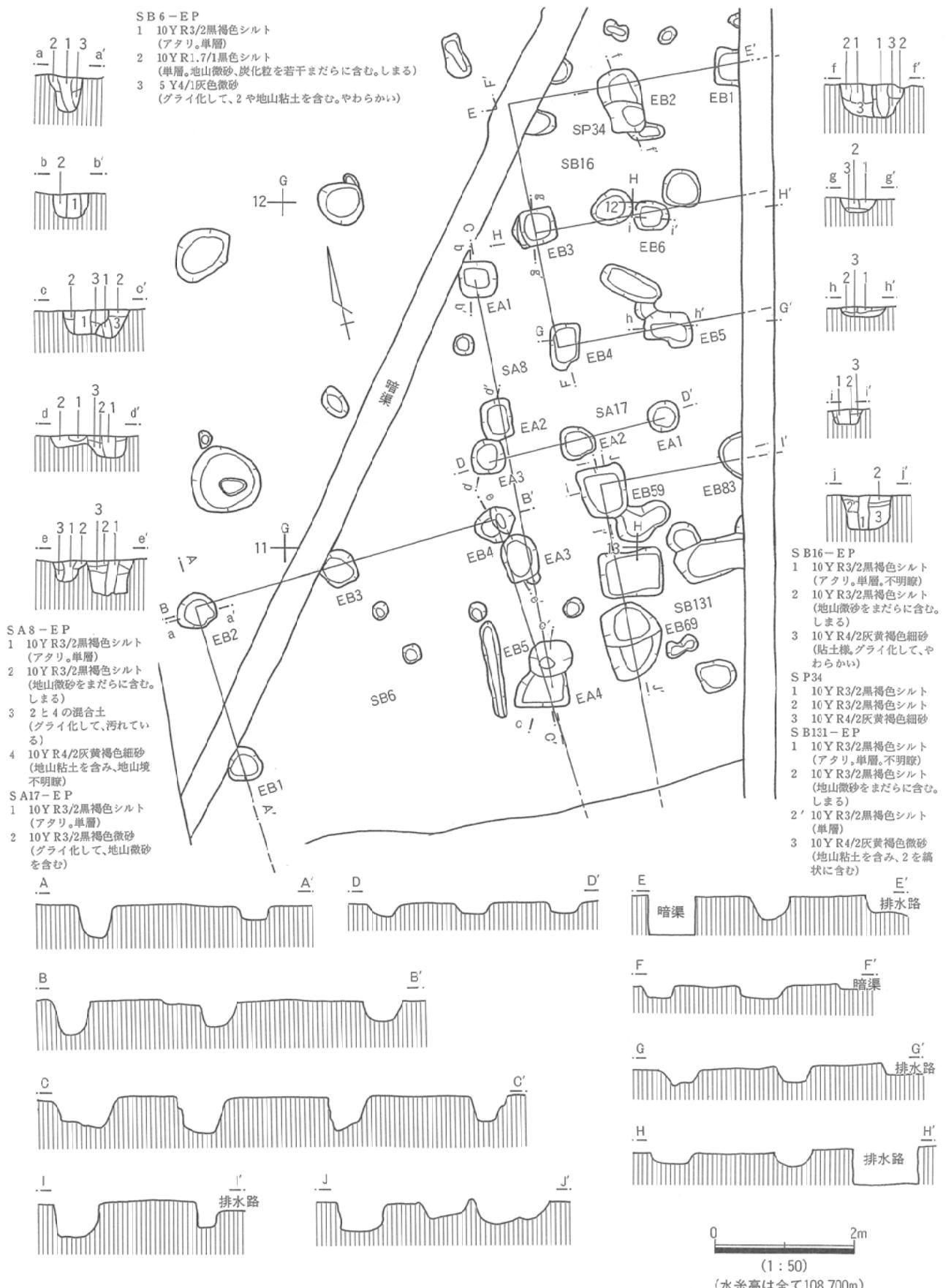


第6図 SB 1 建物跡

検出遺構



第7図 SB5・10建物跡



第8図 SB6・16・131建物跡、SA8・17柱列跡

S B 16(第8図) 北区南東部H-12グリッドのIII層上面で検出され、東側が調査区外に延びる梁行3.6m(12尺)、桁行3.3m(11尺)以上を測る2×1間以上の建物跡で、主軸方位はN-1°00'-Eである。柱間は梁行180cm(6尺)、桁行150cm(5尺)である。上面がかなり削平を受けるが、柱穴の掘り方は平面形が隅丸方形で、長軸で50cm前後を測り、深さは18~30cmしか残存しない。壁は垂直で底面は平坦である。出土遺物は須恵器のヘラ切りの壺がある。

S B 131(第8図) 北区南東部H-11グリッドのIII層上面で検出され、南側を用水路の攪乱により壊され、東側が調査区外に延びる。梁行2.4m(8尺)、桁行2.7m(9尺)を測る1×2間規模の建物跡で南・東側が調査区外に延びる。主軸方位はN-2°00'-Eである。柱間は梁行・桁行210cm(7尺)である。掘り方は平面形がやや大きい隅丸方形や長方形で、長軸80cm、短軸75cmを測る。深さは36~45cmを測り、壁は垂直で底面も平坦で、断面形は長方形を呈する。出土遺物は見られない。

S B 124(第9図) 北区北半部E-15グリッドのIII層上面で検出され、梁行2.4m(8尺)、桁行2.7~3.0m(9~10尺)を測る1×2間規模の建物跡で、主軸方位はN-6°00'-Eでほぼ磁北を取る。柱間は梁行240cm(9尺)、桁行135cm(4.5尺)である。掘り方は平面形が小判形で、長軸50cm前後、短軸30cmを測る。深さは規模の割に深く25~35cmを測り、壁は垂直で底面も平坦である。主軸や掘り方、覆土が他の建物跡群等と異なるが、出土遺物が見られず、詳細は不明である。

2 柱列跡

掘立柱建物跡に近接して3列の柱列が検出された。建物跡と思われる掘り方も確認できたが、柱穴の組み合わせ等で無理が伴うため、積極的に建物跡とするまでには至らなかった。以下に柱列について概述する。

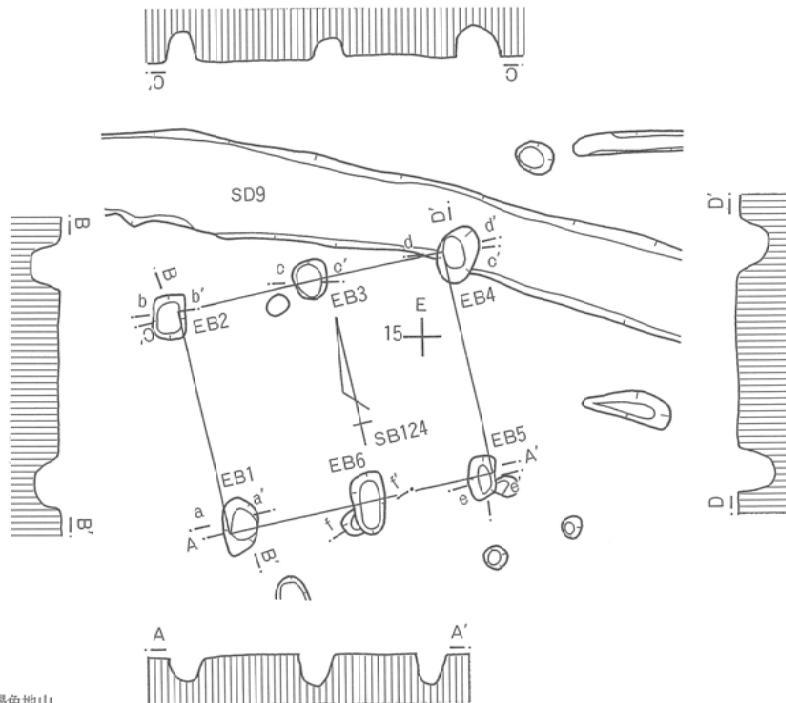
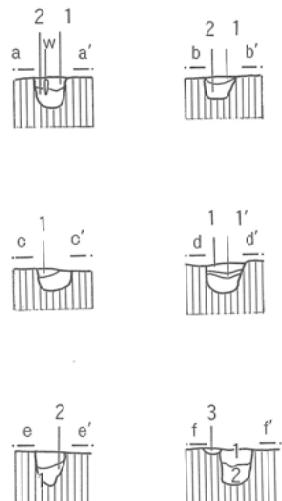
S A 8(第8図) 北区南東部G~H-11~12グリッドのIII層上面で検出された柱列である。全長6.0m(20尺)の3間規模で、主軸方位はN-3°00'-Eである。柱間は200cm(約7尺)前後である。掘り方は平面形が隅丸方形で、長軸で60cm、短軸46cmを測る。深さは38~48cmを測り、壁は垂直で底面も平坦で、断面形は方形を基調とする。遺物は「国分寺下層式」期の壺や須恵器の甕等が出土した。

S A 17(第8図) 北区南東部H-11グリッドのIII層上面で検出された、東側が調査区外に延びる可能性もある。全長2.7m(9尺)を測る2間規模の建物跡で、主軸方位はN-1°00'-Wである。柱間は、135cm(4.5尺)である。掘り方は平面形が円形で、径45cm前後を測る。深さは12~18cmを測り、断面形は円形を呈する。遺物は「国分寺下層式」期の土師器壺が出土した。

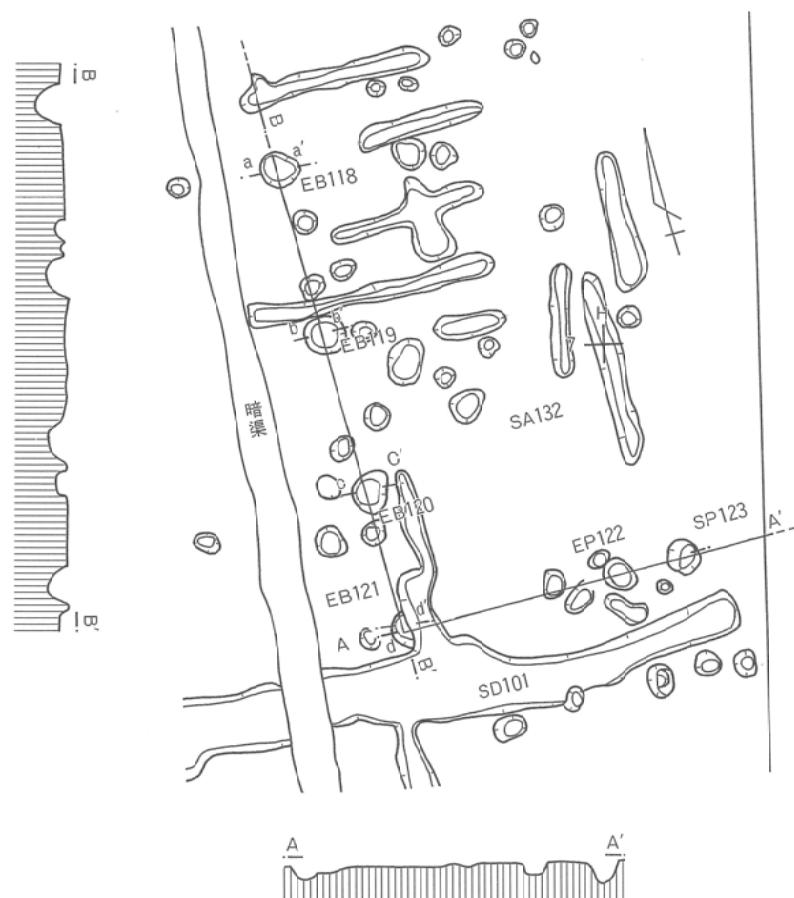
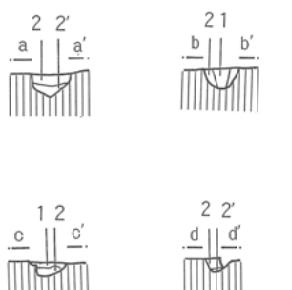
S A 132(第9図) 南区北東部H-7グリッドのIII層上面に位置し、南北軸5.1m(17尺)、東西軸2.4m(8尺)を測る。3×1間以上のL字形に検出され、主軸方位はN-2°00'-Eの柱間は170cm(約6尺)である。掘り方は平面形は円形、断面は半円形で、径40cm前後を測り、深さは浅く20cm程である。南面に50cmの浅溝が平走し、出土遺物は見られない。

当初、SK83・59・60・70・73として登録した遺構は、調査中に建物跡に伴う柱穴として判断され、S B131のE Pとした。S B 6は調査区中央の水路設置に拘わる削平により南半部が壊され、2×1間以上の建物跡である。

SB124



SA132



第9図 SB124建物跡、SA132柱列跡

3 竪穴住居跡

本調査区では古墳時代の竪穴住居跡1棟(ST 3)と奈良、平安時代の竪穴住居跡が1棟(ST 2)検出された。

ST 3(第10図) 南区東半部G～H-4～5グリッドのIII層上面で検出された。中央部を暗渠に切られる。平面形は方形で南北・東西軸共に3.6m前後を測る。

主軸は南北軸でN-2°00'Wである。覆土は基本的に単層で微砂を含む暗褐色シルトである。床面は貼床で、確認面からの深さは10cmを測る。床面は平坦で、壁の立ち上がりは垂直であるが、上部は削平をうけているため不明である。壁溝は認められない。

床は検出面の地山である微砂とその下層の地山粘土を混ぜて貼床としており、床面中央では厚さが4cm程で、壁際付近は掘り方が深いため貼床を厚くし、床をかたくしまらせて平坦にしている。

地床炉(EL 1・2・3)3基を中心部に東西方向に並んで検出する。地床炉は平面形が径20～30cmの楕円形や円形を呈し、床面から3cm前後を浅く掘り込み、底面はよく焼けている。EL 3のみ覆土が炭化物で充満していた。

出土遺物は体部が球形でやや下膨れする土師器甕が北西隅の床面から出土した。出土遺物の特徴や地床炉から古墳時代前～中期にかけての時期と考えられ、西接するE-4グリッドから塩釜式～南小泉II式の高坏が出土していることを考慮すれば同時期の竪穴住居跡と推察される。

ST 2(第10図) 北区西半部A～B-16グリッドのIII層上面で検出された。西側が調査区外に伸びることから不明で、SD 9が重複し東西に走行する。

平面形は方形で南北軸4m、東西軸4.5mを測り、南北軸でN-4°00'Eである。覆土は単層で微砂粒を含む暗褐色粘質シルトである。

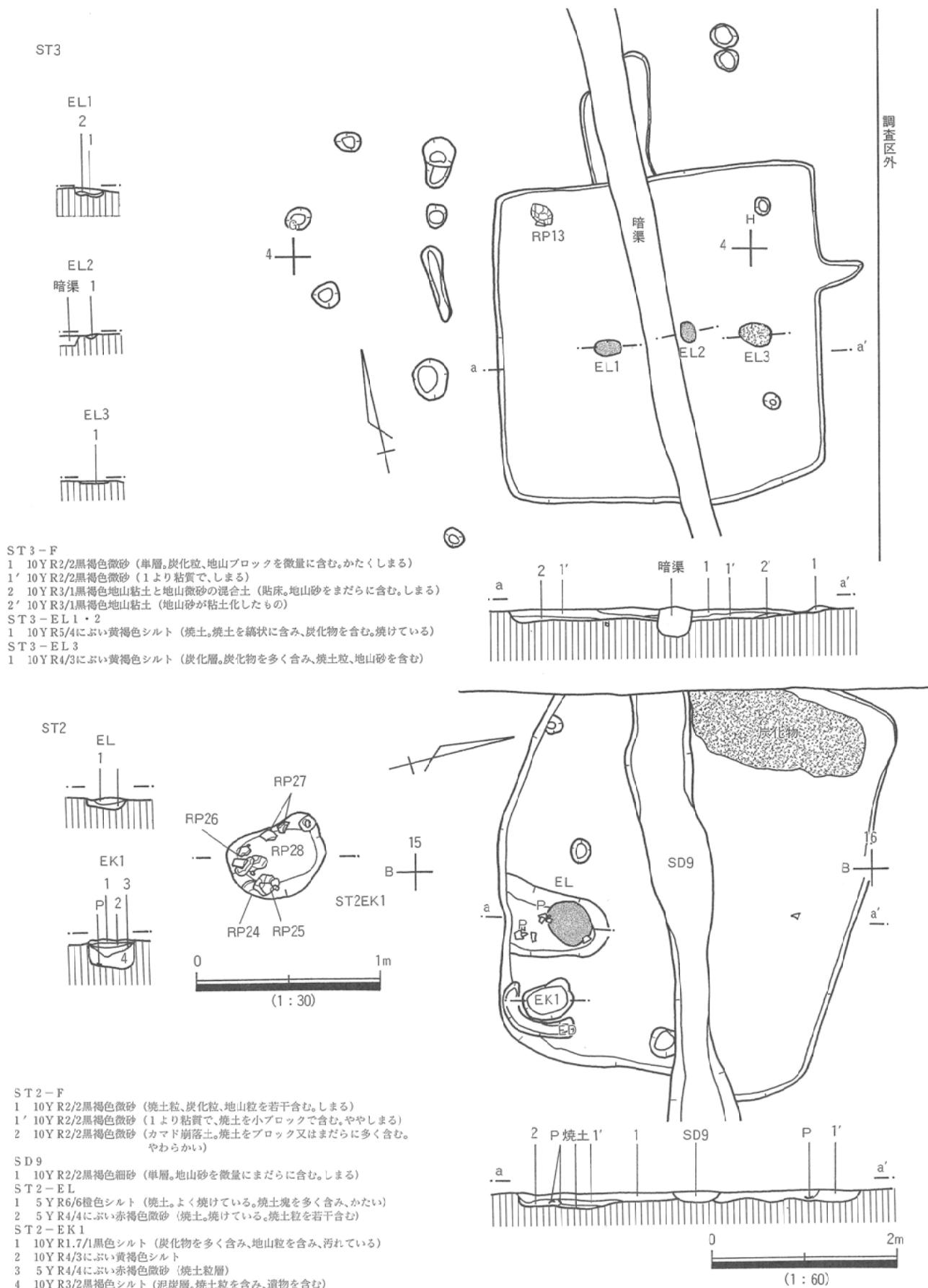
床面は地山を直接使用しているが、西壁際の床面には約60cmの幅で壁に平行して炭化物が検出された。確認面から床面の深さは4cmを測る。床面はやや平坦で、壁の立ち上がりは上部が全体に著しく削平をうけるが、ほぼ垂直である。壁溝は南東隅だけに検出され、幅13cm程で貯蔵穴をL字状に囲んでいる。

カマド(EL 1)は南壁中央部より東寄りに設置されるが、削平が著しく遺存状態は良くない。煙道部は未検出である。燃焼部は全長90cm、幅45cmで浅く掘り込まれU字状を呈し、袖部も痕跡として判断される。焚口部は径約40cmの円形の焼土が検出され良好に焼けている。カマドの基底は床面より3cm程低く位置する。

貯蔵穴(EK 1)は南東隅で確認され、径50cm前後の隅丸方形である。深さは36cmで、壁はほぼ垂直で一部抉れている。覆土は焼土などを間層に挟むが、主体の遺物を含む最下層は泥炭層で厚く堆積している。

出土遺物はカマドやカマド周辺の床面から長胴形の土師器と赤焼土器の甕4個体以上の破片が出土し、貯蔵穴からは内黒土師器高台付坏1個、赤焼土器坏5個体が出土している。中でも赤焼土器坏は底径が小さくなる等の新しい様相を示す。

時代は出土遺物の特徴から9世紀末から10世紀初頭頃と推測される。



第10図 ST2・3竪穴住居跡

4 溝跡(第11図)

調査で溝跡及び畝状溝跡は大小含めて30条以上が確認された。これらの中には単独でやや大形の企画性のある溝跡が検出され、代表的なSD41・43について概要を述べる。

SD41・43 北区中央部のC～E - 8～14グリッドに位置する幅90cm前後のほぼ南北に走行する溝跡である。両溝跡は中間で途切れるが、規模や方向が同一であることから一連の溝跡と推定できよう。主軸はN-6°00' - Wである。床面は平坦であるが、一部凹凸が著しい。掘り込みは確認面から深い所で約20cmを測るが、概ね10cm前後を推移し、壁の立ち上がりは緩やかである。SD41・43はSB1・10などの住居跡の主軸や北区西半部の畝状溝跡群に平走しており、北区東半部の掘立柱建物跡を中心とする居住域と西半部の生産域を区画するように位置する。その他の単独で調査区を走行する幾つかの溝跡(SD9・74・101)も基本的には居住域や生産域を外して掘り込まれる様相が窺える。出土遺物はハケメ調整の土師器甕がある。

5 畝状溝跡(第4・11図)

規模や方位、等間隔的なまとまりを有し一単位とする溝跡群で、分布は調査区全体に散在するが、掘立柱建物跡を中心とする地域にはあまり見られない。代表的な一群として、SD46～51・78～81をあげる。重複関係から少なくとも2時期以上の時間差がある。全長は10mを越すSD46・48・51等の一群もあるが、概ね5m内外で収まり、幅は20cm程である。間隔は2m前後の広間隔と80cm程の狭い間隔のものに分けられるが、前者は一般に全長が長く掘り方もしっかりしている。主軸はSD47・49がSB5等に近いN-1°50' - Eで、他はSB1とほぼ同軸のN-9°00' - Wである。床面は平坦であり、立ち上がりは緩やかである。

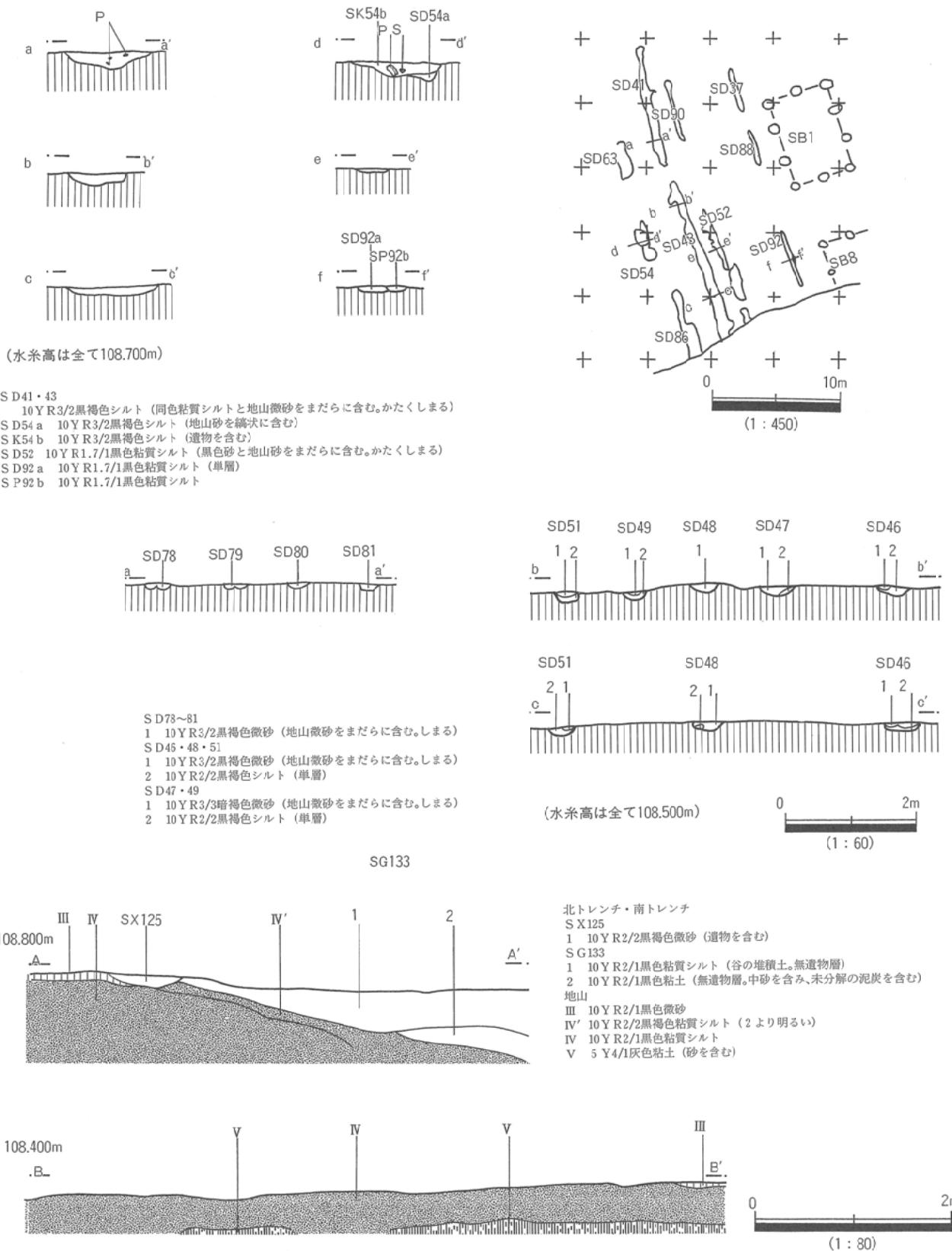
6 落ち込み遺構・河川跡(第11図)

SX125・126 平面形が不明確で、確認面からの深さが比較的浅いものを落ち込みとして判断し登録した。これらは北区北東半部のSG133とした部分の境目に遺物を伴い検出され、微高地から低地に移る境界付近に沿ってできた凹部に、遺物が流れ込みや人為的廃棄などにより堆積したと考えられた。出土遺物は9世紀後半の本遺跡の中では赤焼土器壺や大形の高台付壺等の遺跡の中では新相の土器群がまとまって出土した。

SG133 北区北東半部の河川跡は無遺物層のため形成時期は不明だが、土層断面から少なくともSD125・126が成立時には埋没しており、居住域が近接することからも、集落成立以前には既に埋没し湿地帯になっていたであろう。覆土は黒色粘質シルトである。

一方、南区南西半部の低湿地帯は調査区南壁や南西壁の土層からI・II層(旧耕作土)直下に泥炭層が確認されるため、当初基本層序III層の地山微砂層(遺構確認面)を切る河川跡を考えていた。トレンチの結果、III層の地山微砂層の下に堆積する泥炭層であった。

泥炭層は確認できた深さで1m以上堆積し、上層の地山微砂層は掘立柱建物跡域が最も残存良く遺構確認面から20cm程が堆積し地山層を形成している。地山微砂が現代の耕作によって削平され、下位の泥炭層と同一レベルに表れていることが推測される。ただし、調査区全体の遺構や遺物分布から見れば、南区南西半域は集落形成時から居住域には利用されていないと考えられる。



第11図 SD41・42溝跡、SD46～51・78～81畠状溝跡群、SG133・134河跡

V 出土遺物

1 土器

本遺跡から出土した遺物は整理箱にして約15箱である。種別的には土器・土製品・石製品がある。これらは掘立柱建物跡や竪穴住居跡、溝跡などの遺構からも出土したが、大半は遺構確認面の面整理中に検出され、確実に遺構に伴う遺物は少ない。土器は縄文土器や古式土師器が若干確認されるが、土師器・須恵器・赤焼土器などを中心に概ね奈良時代から平安時代に帰属する土器群が大半である。以下にこれら土器について概述する。

縄文時代の土器(第14図15) S X126より出土し、縄文時代晩期後葉の鉢形の口縁部片で口唇部に沈線を施す。大洞A式期の所産であるが、本遺跡では縄文土器は1点のみで周辺遺跡からの流れ込みの可能性が考えられる。

古墳時代の土器(第13図7) S T 3床面より出土し、本遺跡で遺構に伴い検出した唯一の古墳時代の土師器甕である。底部欠損で、「く」の字口縁甕で体部下間に最大径を有するやや下膨れする球胴形である。体部内外面にハケメを施し、ナデにより口縁部を整えている。時期は器形等の特徴から古墳時代前～中期の所産で、S T 3に近接して出土した脚部が柱実になるであろう高坏(15-1)に併行する塩釜式の新しい段階から南小泉II式の古い段階にかけての時期と判断される。高坏は丹塗りされた痕跡が斑点状に認められ胎土中に赤褐色粒子を含んでいる。

奈良・平安時代の土器 調査区で主体を示す奈良・平安時代の土器群の特徴を概観すれば「土師器・須恵器の優位性、あかやき土器の量的増加」等が指摘できる。特に杯類を分類し、他の器種については概略的な説明を加える。基本的には須恵器(I類)、土師器(II類)、赤焼土器(III類)で、高台をもたないもの(A)、高台をもつもの(B)とに分けた。

SP36出土土器(第14図-10)：本遺跡の主体である奈良・平安時代の遺構の中でも最も古い様相をもった須恵器坏が出土した。底径が大きくやや浅身で逆台形を呈し、底部に丁寧な回転ヘラケズリを施す一群(I A1類)である。器形的特徴として体部下端でやや膨らみを持ち直線的に立ち上がる事が上げられる。底部の切り離しが静止糸切りのものをI A1a類とした。量的には僅かであるが、形態や底部調整等の特徴から次段階のヘラ切り無調整の一群(I A2・3類)に先行すると考えられる。

SB10出土土器(第12図10～15)：掘立柱建物跡の柱穴出土で、図化できた資料は土師器坏・甕、須恵器高台付坏・甕である。土師器坏(12-13)は有段丸底で「国分寺下層式」期の土器である。微弱な沈線により体部下半を画するもの(II A1a類)で、外面は段より上部がミガキ・下部がヘラケズリを施し、内面は一部ナデを施すが黒色処理しない。須恵器高台付坏(12-15)は細身で比較的長い高台がつき、体部下端に稜を形成し直線的に立ち上がる一群(I B1類)である。底径9cm代の中型品をI B1a類とした。12-12は長胴平底の底部で外面にハケメ・ケズリを施す土師器甕である。貯蔵具では頸部に青海波紋を施す須恵器甕が出土した。

S B10と重複関係にあり、S B10より古いS B 5からは口径が約16cm内外の大口徑の須恵器坏片(12-4)や、平底で底部に葉脈痕が残る土師器甕(12-9)や外面平行タタキ・内面同心

円状のアテの須恵器甕等(12-6・8)が確認された。

S A 8 出土土器(第12図16~18)：図化できたものは内面黒色処理する土師器坏・甕、須恵器甕の3点である。土師器坏(12-17)は底部を欠くが、口縁部や体部等の形態から、無段で丸底風平底の体部内湾するやや身の浅い一群(II A2類)で、「国分寺下層式」期の範疇に含まれる。外面口縁部を横ナデの後横ヘラミガキし、体部下半を持ちヘラケズリする。内面は主に横ヘラミガキ後黒色処理する。

II A2類とした形態はSK55(13-11)やSA17E P 1(12-19)からも出土している。特にSK55からは平底で葉脈痕のある土師器甕が出土し、SK55に切られるSB1からは土師器の内外面ハケメ調整の甕口縁部(12-2)や漆が付着する破片(12-1)が確認され、この時期に併行する土師器甕の特徴や様相が窺える。

12-16は須恵器甕で外面に平行タタキ、内面に無文状のアテを施している。本調査では外面平行・格子目のタタキと内面同心円のアテが一般的であるが、この内面無文状のアテも量的に一定量を占める。

SB16 出土土器(第12図14)：須恵器坏はヘラ切り無調整で、浅い逆台形を呈し、底部が縮小化し、体部は短く直線的に立ち上がる一群(I A2類)である。底径が8~9cm代を測る中型品をI A2a類とした。この一群は調査区でも包含層から一定量確認できる(15-6・15-9)。

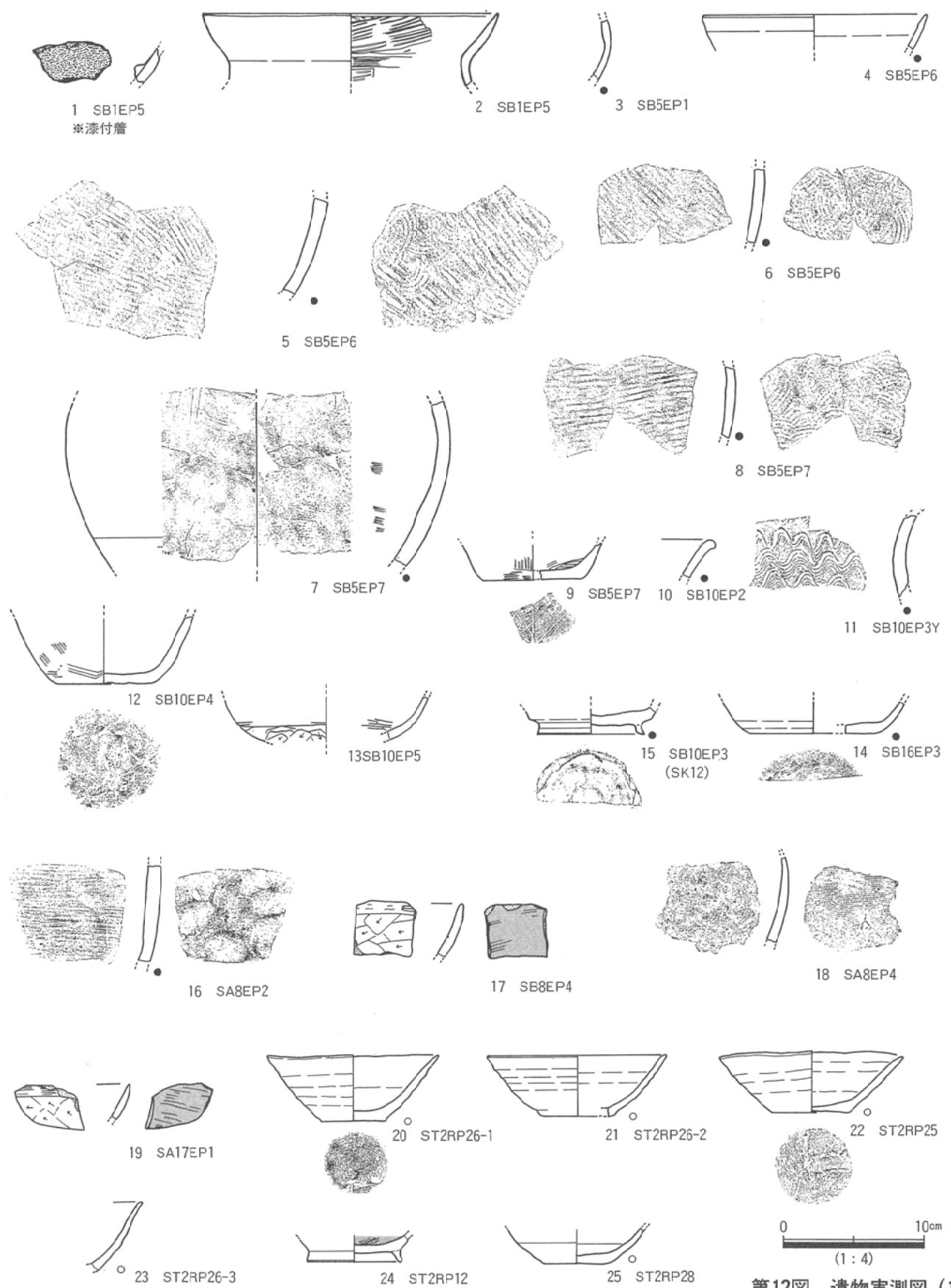
SP91 出土土器(第14図12・13)：黒色化された土師器坏・高台付坏が各々1点確認された。土師器坏(14-12)は、平底でやや底径の大きい椀状を呈するもの(II A3類)で、外面体部下半から底部にかけて持ちヘラケズリを施し、底部切離しは不明である。内面は黒色化される。土師器高台付坏(14-13)は内外面黒色化で、やや内湾する高台がつく器形である(II B類)。

SK11 出土土器(第13図8~10)：図化できた資料は須恵器高台付坏・甕、内黒土師器坏の3点である。須恵器高台付坏(13-8)は底径が6cm台の回転糸切りでしっかりした高台が直立気味に付き、やや内湾しながら外傾する立ち上がりを示す一群(I B2類)である。土師器坏(13-10)はロクロ使用の椀状を呈し、底部は回転糸切りである。外面口唇部に横ミガキを施し、体部中位から底部まで回転ヘラケズリを施すもの(II A4類)である。体部中位まで回転ヘラケズリを施すことから古い様相も持つ形態といえよう。須恵器甕(13-9)は外面平行タタキ、内面が無文状のアテを施している。

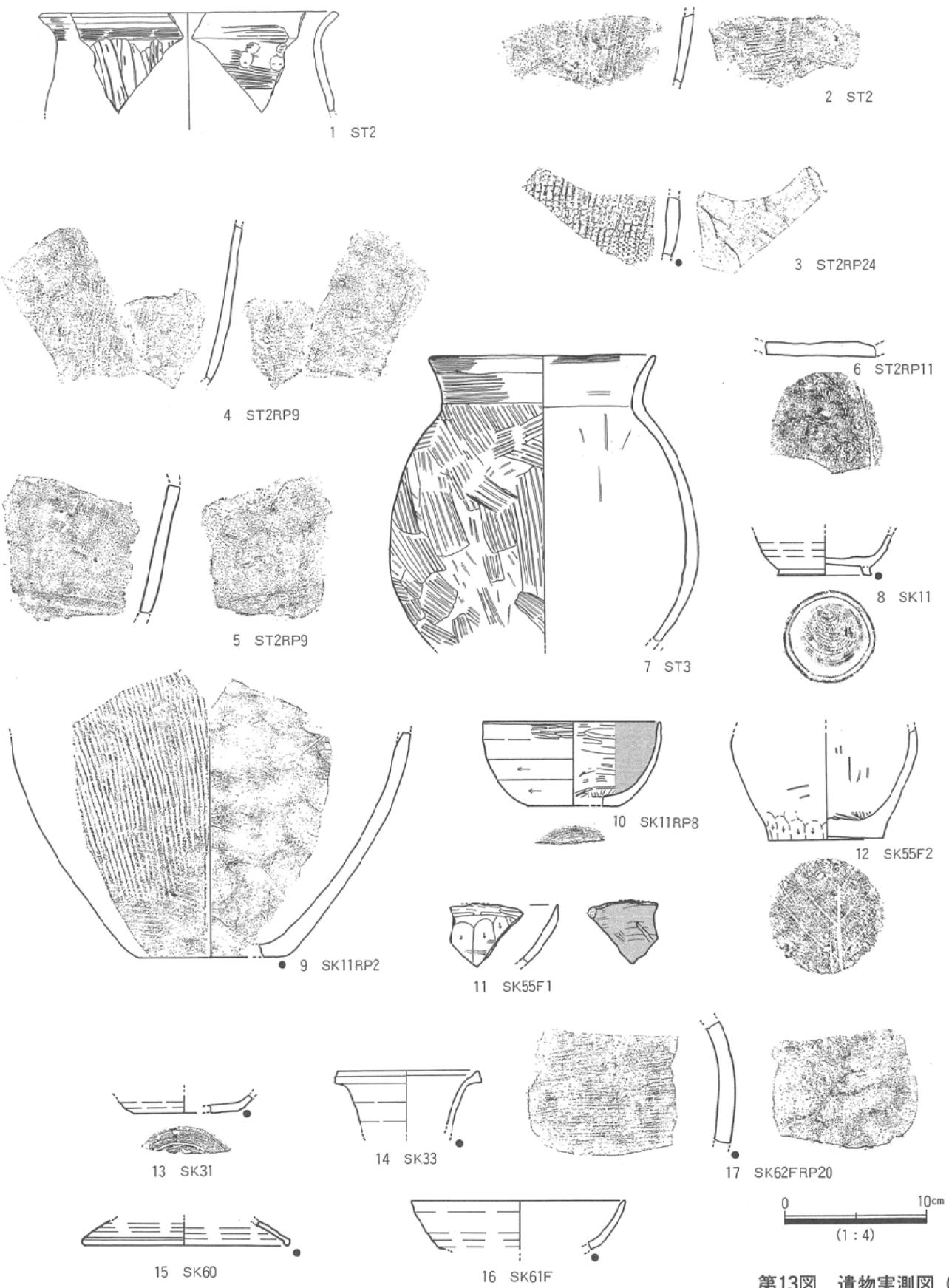
SP65 出土土器(第14図11)：SP65の須恵器坏は、底部の切り離しが回転糸切りの一群(I A4類)で、底部が6cm強で、概ね緩やかに内湾し立ち上がる。(I A4類)と同様に底部切り離しが回転糸切りの坏(15-15・17-18)は包含層等で散見され、確実に一定量存在する。

S T 2 出土土器(第12図20~第13図6)：本遺跡で最もまとまって遺物が出土した遺構である。カマド底面より土師器甕が出土し、破片であるが少なくとも4個体(R P11~15)が確認された。また、貯蔵穴底面より赤焼土器坏類を中心に供膳具がほぼ完形品で5個体(R P24~28)出土した。赤焼土器坏(12-20~24)は、底径が5cm程に最小化し、立ち上がりは直線的に外傾する一群(III A1類)で、全体にロクロ目が著しい特徴がある。内黒土師器の高台付坏(12-25)は底径が小さく細形の高台を有し、底部に菊花状のナデつけ痕が残る。土師器甕類はロクロ不使用で

出土遺物

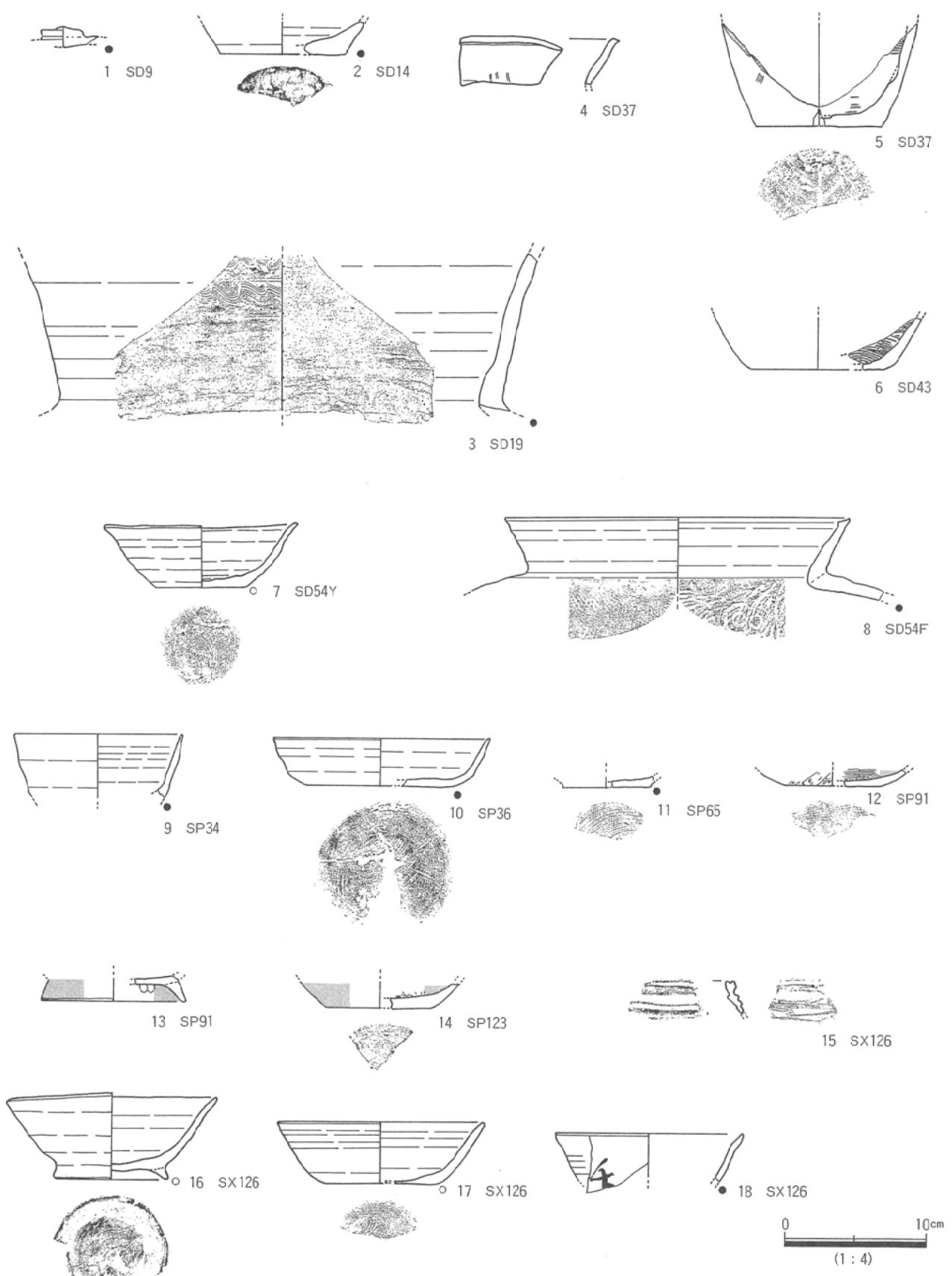


第12図 遺物実測図 (1)

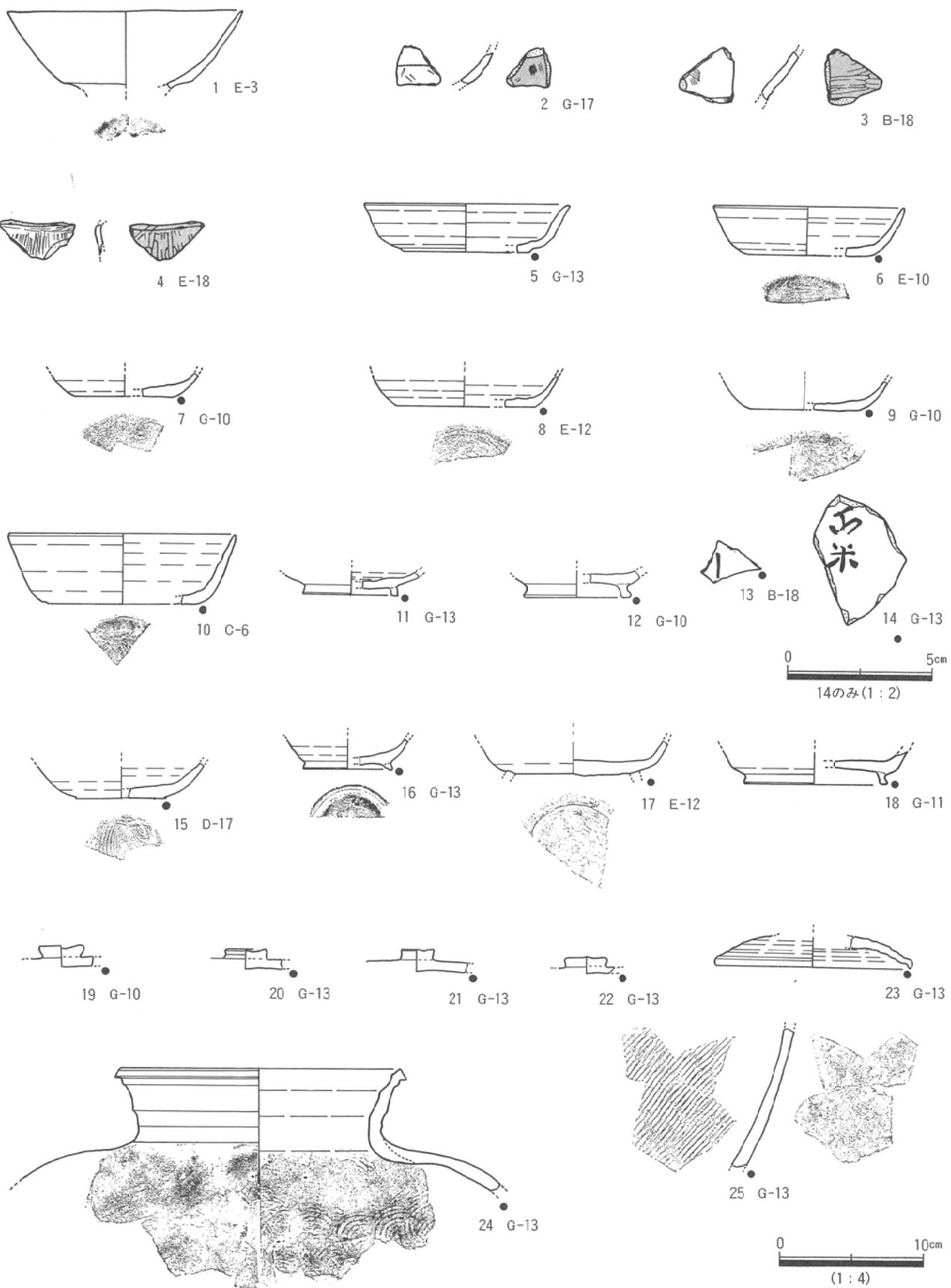


第13図 遺物実測図 (2)

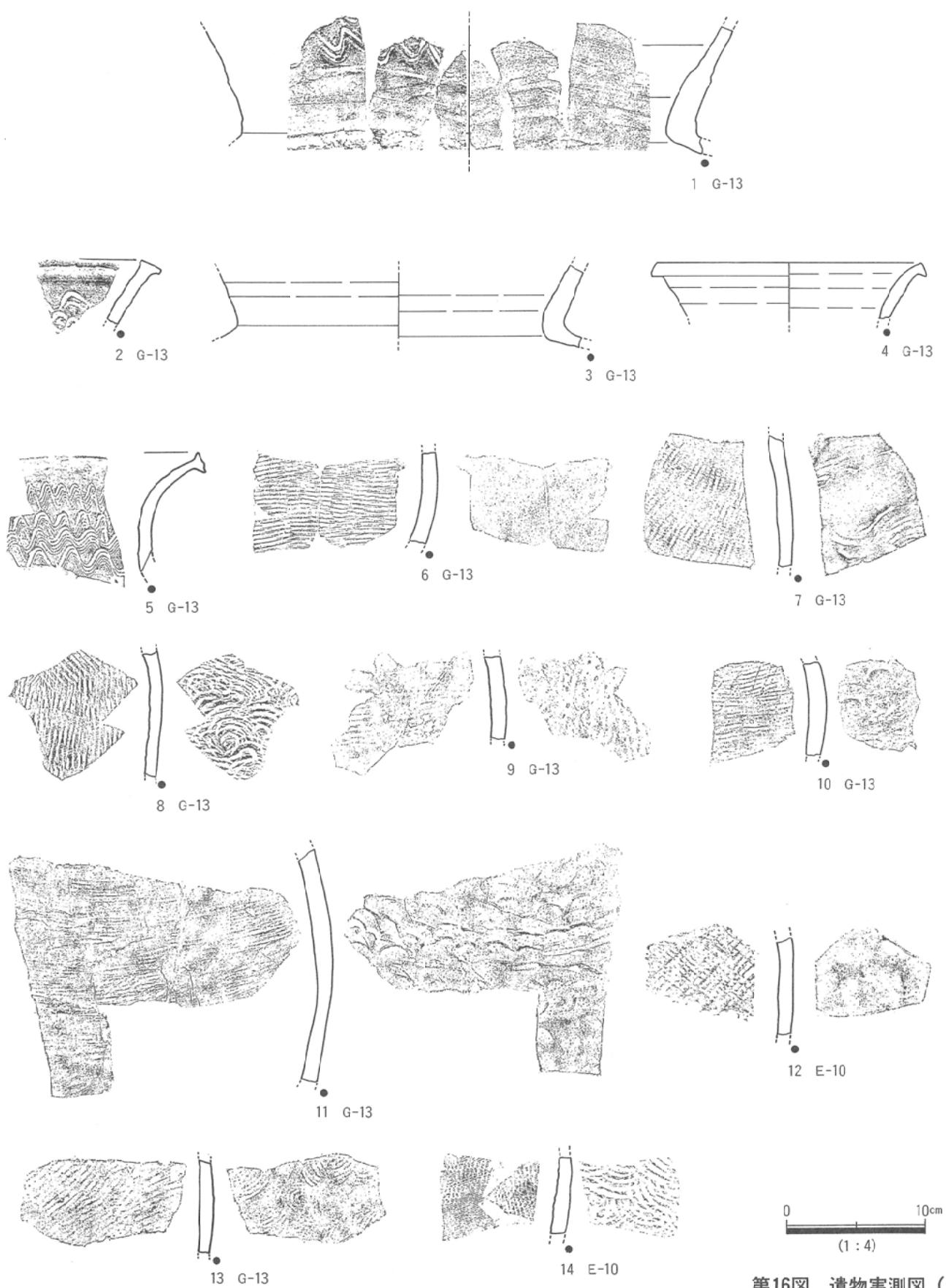
出土遺物



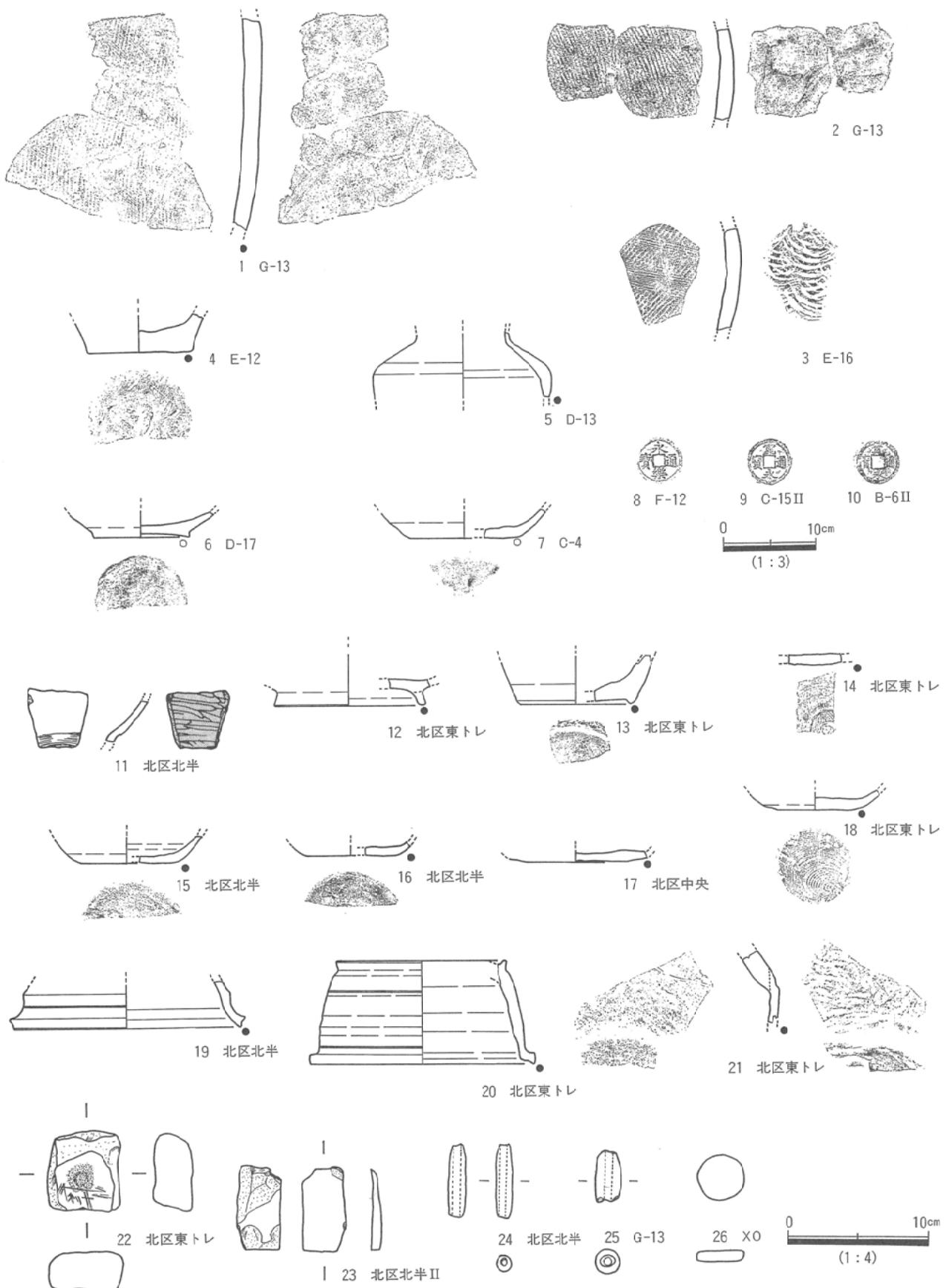
第14図 遺物実測図（3）



第15図 遺物実測図 (4)



第16図 遺物実測図 (5)



第17図 遺物実測図 (6)

体部内外面にハケメを施すもの(13-2・4)、ロクロ使用で体部上半からハケメ後、縦のヘラケズリ調整を行い、内面をヘラナデ調整したもの(13-1)等が見られる。須恵器甕は外面格子目状タタキ、内面無文状アテである。

SX126出土土器(第14図15~18)：北区北半の低地に変わる凹部の土器溜まりであり、本遺跡で最も新しい土器群が出土する。繩文土器片や墨書き土器を含む遺物が得られたが、主体は赤焼土器坏(14-17：III A1類)と高台付坏(14-18：III B1類)である。III B1類は所謂足長高台で法量の大きい坏身がつき、新しい器種の出現からST2より幾分後出と推測される。

遺構外出土の土器

調査区では包含層からも特徴的な土器が確認され、代表的な土器について概述する。

須恵器坏底部片(17-9)は、底部に回転ヘラケズリを施し、底部切り離しが回転糸切りのもの(I A1b類)で、底部に回転ヘラケズリを施す点からI A1類の一形態と考えられる。

須恵器坏(15-8)・須恵器高台付坏(15-18)は、大型で各々ヘラ切り無調整のI A2a・I B1a類と同形ながら、法量の大きい底径が10cm以上の一組(I A2b・I B1b類)である。

土師器坏では、所謂有段丸底(II A1類)の「国分寺下層式」期の一群が上げられる。15-3・17-11の外面に明瞭な段を有するもの(II A1b類)や、15-2は外面に弱い段を持つもの(II A1c類)等が出土した。外面段より上がナデ・下がヘラケズリ、内面横ミガキで黒色処理を施している。外面の段の形態から前者が後者に先行する一群と判断される。また、土師器(15-4)は外面に縦ハケメが残る内面黒色化の鉢状の椀と考えられ、II A1類と同時期が推測される。

一方、須恵器坏(17-15・16)はI A2類と同様のヘラ切り無調整であるが、底径が約7cm代前後まで縮小する一群(I A3a類)で、一般的な糸切り形態と外観で類似し、上記I A1・2類より後出する土器群と考えられる。15-10はI A3a類と同器形で、法量の大きいもの(I A3b類)である。また、赤焼土器坏(17-7)はI A3a類と同形のヘラ切り形態で、胎土が明らかに須恵器とは異なり、酸化炎焼成の一組(III A1類)が散見される。

赤焼土器高台付坏(17-6)は施釉陶器に類似する高台がつくもの(III B2類)である。

その他の特徴的な土器としては墨書き土器が上げられる。須恵器坏片で、ヘラ切り底部に「栗」(15-14)、体部に「大」カ(14-18)等の文字と、体部に墨痕がある(15-13)ものがある。

円面硯が2点出土した。17-20は脚部がやや開き脚端部で屈曲外反し、硯部と脚部・脚部と脚端部の境に線刻が巡る。17-19は脚部と脚端部との境に線刻が巡り、脚部の屈曲は鈍化する。

他に包含層からは近世の青磁や染付など陶磁器類が出土した。

2 土製品・石製品・古銭

土製品では包含層から土錐が出土した。手捏ねで作られ長さ4cm、直径1.5cm前後を測る紡錘形で円孔をもつ17-24と、半損で、直径2cm程の紡錘形でやや大形品の17-25がある。

石製品では包含層出土の砥石がある。17-20は凝灰岩の角柱状を呈し、表面には数条刻線がある。17-21は安山岩で平面形が長方形で裏面は一部自然面が残り、断面形は厚さが5mm程の薄型の長方形である。17-26は凝灰岩の約3cm径の円盤状を呈し、厚さは0.5cmである。

古銭は包含層より「永楽通宝」(11-4)、「寛永通宝」(11-5・6)が出土した。

表-1 出土遺物観察表(1)

探査番号	遺物番号	種別	器種	計測値(cm)			底部切離・調整	調整技法		遺構番号	登録番号	備考				
				口径	底径	器高		外 面								
								内 面								
第12回	1	土師器	甕					ナデ		SB 1-EP5		漆付着				
	2	土師器	甕	(21.0)				ナデ	ハケメ	SB 1-EP5						
	3	須恵器	壺					ロクロ	ロクロ	SB 5-EP1						
	4	須恵器	壺	(16.0)				ロクロ	ロクロ	SB 5-EP6						
	5	須恵器	甕					平行タタキ	平行アテ	SB 5-EP6						
	6	須恵器	甕					平行タタキ	同心円アテ	SB 5-EP6						
	7	須恵器	壺					ロクロ→体部下半回転ケズリ	無文アテ	SB 5-EP7						
	8	須恵器	甕					平行タタキ	同心円アテ	SB 5-EP7						
	9	土師器	甕		(7.2)		木葉痕	縦ハケメ	ハケメ	SB 5-EP7						
	10	須恵器	壺					ロクロ	ロクロ	SB 10-EP2						
	11	須恵器	壺					櫛描波状文	ロクロ	SB 10-EP3						
	12	土師器	甕		7.2		切離不明	手持ちヘラケズリ		SB 10-EP4						
	13	土師器	壺					段上ミガキ・段下ケズリ	ナデ	SB 10-EP5		内面未黒色化				
	14	須恵器	壺	8.8				ロクロ	ロクロ	SB 16-EP3						
	15	須恵器	高台付壺		7.2		ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	SB 10-EP3		S K12				
	16	須恵器	甕					平行タタキ	無文アテ	SA 8-EP2						
	17	土師器	壺					口縁ナデ→ミガキ・体部ケズリ	横ミガキ・黒色化	SA 8-EP4						
	18	土師器	甕						ハケメ	SA 8-EP4						
	19	土師器	壺					口縁ナデ・体部ケズリ	横ミガキ・黒色化	SA 17-EP1						
	20	赤焼土器	壺	12.2	4.7	4.6	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	ST 2-EK						
	21	赤焼土器	壺	13.0	5.2	4.4	回転糸切り、切離不明	ロクロ	ロクロ	ST 2-EK						
	22	赤焼土器	壺	13.2	5.6	4.3	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	ST 2-EK						
	23	赤焼土器	壺					ロクロ	ロクロ	ST 2						
	24	土師器	高台付壺		6.8		菊花状ナデつけ・切離不明	ロクロ	ミガキ・黒色化	ST 2						
	25	赤焼土器	壺		4.5		切離不明	ロクロ	ロクロ	ST 2						
第13回	1	土師器	甕	(21.3)				ロクロ・体部縦ケズリ	横ハケメ	ST 2-Y	R P27					
	2	土師器	甕					縦ハケメ	横ハケメ	ST 2						
	3	須恵器	甕					格子目タタキ	無文アテ	ST 2	R P24					
	4	土師器	甕					縦ケズリ		ST 2	R P9					
	5	土師器	甕					縦ハケメ	横ハケメ	ST 2	R P9					
	6	土師器	甕				切離不明			ST 2	R P11	調痕有り				
	7	土師器	甕	(16.2)				口縁横ナデ・体部縦ハケメ	口縁ナデ・体部ハケメ→ナデ	ST 3	R P13					
	8	須恵器	壺		6.2		回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SK 11	R P					
	9	須恵器	甕	(10.0)			切離不明	平行タタキ	無文アテ	SK 11	R P2					
	10	土師器	壺	12.8	6.4	6.0	回転糸切り→回転ヘラケズリ	口縁横ミガキ・下半回転ヘラケズリ	横ミガキ・黒色化	SK 11	R P8					
	11	土師器	壺					口縁ミガキ・体部ケズリ	横ミガキ・黒色化	SK 55-F1						
	12	土師器	甕		8.2		木葉痕	ハケメ	ハケメ	SK 55-F1						
	13	須恵器	壺		7.4		回転ヘラケズリ・切離不明	ロクロ	ロクロ	SK 31						
	14	須恵器	壺	(10.0)				ロクロ	ロクロ	SK 33						
	15	須恵器	甕	(17.8)				ロクロ	ロクロ	SK 60						
	16	須恵器	壺	(15.2)				ロクロ	ロクロ	SK 61-F						
	17	須恵器	甕					平行タタキ	無文アテ	SK 62-F						
第14回	1	須恵器	蓋					ロクロ	ロクロ	SD 9						
	2	須恵器	蓋		(8.8)		切離不明	ロクロ	ロクロ	SD 14						
	3	須恵器	甕					ロクロ・櫛描波状文	ロクロ	SD 19						
	4	土師器	甕					横ナデ	横ナデ	SD 37						
	5	土師器	甕		9.1		木葉痕	縦ハケメ	横ハケメ	SD 37						
	6	土師器	甕		(10.5)		ヘラ切り		横ハケメ	SD 43						
	7	赤焼土器	壺	13.8	5.8	4.4	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SD 54-Y						
	8	須恵器	甕	24.6				平行タタキ	同心円アテ	SD 54-F						
	9	須恵器	壺	(12.0)				ロクロ	ロクロ	SP 34						
	10	須恵器	壺	15.3	10.0	3.5	静止糸切り→回転ヘラケズリ	ロクロ	ロクロ	SP 36						
	11	須恵器	壺		(6.2)		回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SP 65						
	12	土師器	壺		(7.1)		手持ちヘラケズリ→不明	手持ちヘラケズリ	横・放射状ミガキ・黒色化	SP 91						
	13	土師器	高台付壺		(10.2)		黒色化・切離不明	ミガキ・黒色化	ミガキ・黒色化	SP 91						
	14	土師器	壺		(7.5)		黒色化・切離不明	ミガキ・黒色化	ミガキ・黒色化	SP 123						
	15	繩文土器	鉢					沈線	沈線	SX 125						
	16	赤焼土器	高台付壺	15.0	6.1	8.0	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SX 125						
	17	赤焼土器	壺	14.6	7.8	4.4	回転糸切り	ロクロ	ロクロ	SX 125						
	18	須恵器	壺					ロクロ	ロクロ	SX 125		墨書き土器「大」				
第15回	1	土師器	高壺							E-3		内外面赤彩				
	2	土師器	壺					段上ナデ・下ケズリ	ミガキ・黒色化	G-12						
	3	土師器	壺					段上ナデ	横ミガキ・黒色化	B-18						

表-2 出土遺物観察表(2)

捕団番号	遺物番号	種別	器種	計測値(cm)			底部切離・調整	調整技法		遺構番号	登録番号	備考
				口径	底径	器高		外 面	内 面			
第15 図	4	土師器	碗					頭部下縁ハケメ	頭部下縁ミガキ→黒色化	E-18		
	5	須恵器	环	(14.4)	(9.0)	(3.4)	切離不明	ロクロ	ロクロ	G-13		
	6	須恵器	环	13.4	8.6	3.5	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	E-10		
	7	須恵器	环		(7.2)		ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	G-10		
	8	須恵器	环		(10.0)		ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	E-12		
	9	須恵器	环		(7.8)		ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	G-10		
	10	須恵器	环	(16.0)	(10.4)	5.0	ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	C-6		
	11	須恵器	高台付环		(6.6)		切離不明	ロクロ	ロクロ	G-13		
	12	須恵器	高台付环		(7.6)		不明	ロクロ	ロクロ	G-13		
	13	須恵器	环					ロクロ	ロクロ	B-18	墨書き器墨痕	
第16 図	14	須恵器	环				ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	G-13	墨書き器「粟」	
	15	須恵器	环		(6.2)		回転糸切り	ロクロ	ロクロ	D-17		
	16	須恵器	高台付环		(6.2)		ナデつけ・切離不明	ロクロ	ロクロ	G-13		
	17	須恵器	高台付环		(8.6)		ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	E-12		
	18	須恵器	高台付环		(10.0)		回転糸切り	ロクロ	ロクロ	G-11		
	19	須恵器	蓋					ロクロ	ロクロ	G-10		
	20	須恵器	蓋					ロクロ	ロクロ	G-13		
	21	須恵器	蓋					ロクロ	ロクロ	G-13		
	22	須恵器	蓋					ロクロ	ロクロ	G-13		
	23	須恵器	蓋	(13.8)				ロクロ	ロクロ	G-13		
	24	須恵器	甕					ロクロ・平行タタキ	ロクロ・同心円アテ	G-13		
	25	須恵器	甕		(19.6)			平行タタキ	無文アテ	G-13		
第17 図	1	須恵器	甕					ロクロ・櫛描波状文	ロクロ	G-13		
	2	須恵器	甕					ロクロ・櫛描波状文	ロクロ	G-13		
	3	須恵器	甕					ロクロ・櫛描波状文	ロクロ	G-13		
	4	須恵器	甕					ロクロ	ロクロ	G-13		
	5	須恵器	甕					ロクロ・櫛描波状文	ロクロ	G-13		
	6	須恵器	甕					平行タタキ	無文アテ	G-13		
	7	須恵器	甕					平行タタキ	同心円アテ	G-13		
	8	須恵器	甕					平行タタキ	同心円アテ	G-13		
	9	須恵器	甕					平行タタキ	同心円アテ	G-13		
	10	須恵器	甕					平行タタキ	同心円アテ	G-13		
	11	須恵器	甕					平行タタキ→ナデ	青海波文アテ	G-13		
	12	須恵器	甕					格子目タタキ	無文アテ	E-10		
	13	須恵器	甕					平行タタキ	同心円アテ	G-13		
	14	須恵器	甕					平行タタキ	青海波文アテ	E-10		
第18 図	1	須恵器	壺					平行タタキ	無文アテ	G-13		
	2	須恵器	壺					平行タタキ	無文アテ	G-13		
	3	須恵器	壺					平行タタキ	青海波文アテ	E-16		
	4	須恵器	壺		7.4		ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	E-12		
	5	須恵器	壺					ロクロ	ロクロ	D-13		
	6	赤燒土器	高台付环		6.8		菊花状ナデつけ・切離不明	ロクロ	ロクロ	D-17		
	7	赤燒土器	环		(7.6)		ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	C-4		
	8	古錢								F-12	永樂通宝	
	9	古錢								C-15	寛永通宝	
	10	古錢								B-6	寛永通宝	
	11	土師器	环					段上ナデ	横ミガキ・黒色化	北区北半		
	12	須恵器	高台付环		(10.6)			ロクロ	ロクロ	北区東トレ		
	13	須恵器	壺		(7.8)			ロクロ	ロクロ	北区東トレ		
第19 図	14	須恵器	环		(9.0)		回転糸切→回転ヘラケズリ	ロクロ	ロクロ	北区東トレ		
	15	須恵器	环		6.8		ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	北区北半		
	16	須恵器	环		6.6		ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	北区北半		
	17	須恵器	环		(8.0)		ヘラ切り	ロクロ	ロクロ	北区中央		
	18	須恵器	环		5.2		回転糸切り	ロクロ	ロクロ	北区東トレ		
	19	須恵器	硯		(16.2)			ロクロ	ロクロ	北区北半		線刻有り
	20	須恵器	硯	(12.1)	(15.9)	(7.4)		ロクロ	ロクロ	北区東トレ		線刻有り
	21	須恵器	横瓶						平行アテ	北区東トレ		
	22	石製品	砥石			5.6				北区東トレ	凝灰岩製	
	23	石製品	砥石			5.4				北区北半II	泥岩製	
	24	土製品	土錐			5.1				北区北半	孔有り	
	25	土製品	土錐							G-13	孔有り	
	26	石製品	円盤状製品			3.3				X.O.	凝灰岩製	

VI まとめ

1 調査のまとめ

調査では掘立柱建物跡・竪穴住居跡・柱列・溝跡・畝状溝跡群・落ち込み遺構等を検出した。遺構分布からは遺跡の主体が調査区の東側に広がる傾向を示している。遺物は竪穴住居跡や落ち込み遺構などでまとまった土器類が出土したものの、多くは単発的で大半の遺物は包含層からの出土であった。以下に遺構と遺物について整理してまとめる。

本遺跡で出土した最も古い遺物としては縄文時代晚期後葉の縄文土器が1点あげられる。本遺跡に南接する同時期の北柳1遺跡や周辺の集落遺跡などとの関係が推測される。

古墳時代の遺構・遺物はST3の竪穴住居跡が上げられ、床面出土の甕や、炉跡が地床炉であること、近接して出土した高杯から古墳時代前～中期の塩釜式～南小泉II式と考えられる。

本遺跡で主体を占める奈良・平安時代は掘立柱建物跡を中心とした遺構が検出された。建物跡は出土遺物からこの頃のものとしては概ね古い時期に属すると判断され、SB5がSB10に切られる事等から同時期内での重複も見られる。主軸方向の面でもSB5と同方向に磁北から僅かに東に振れる一群(SB131・SA132)と、SB10と同方向の西に傾く一群(SB1・16)が見られ、概して前者は柱穴の掘り方が平面形が方形を呈し大形で、後者は平面形が橢円形で小形化する傾向が窺えた。年代的にはSB6→SA8→SA17から3時期以上の変遷が認められるものの、出土遺物から「国分寺下層式」期の範疇に含まれ、8世紀後半の近接した時期と判断される。

SD41・43溝跡や畝状溝跡群は出土遺物が散見で年代根拠に乏しいが、走行する主軸方向が建物跡群と一致或いは直交することから建物跡群と同時期と考えられる。特に畝状溝跡群は主軸の擦れが認められ、各時期の建物跡の主軸方向に対応するものと判断される。

これらの遺構の分布や配置を概括すれば、「主軸を同じくする建物が数棟立ち並ぶ居住域があり、その周辺に畝状溝群などの生産域が広がり、それらに併走してやや大形の溝が居住域と生産域を区画する」集落構成が推測される。

一方、遺物相の特徴から小さい底部の回転糸切りの須恵器坏や、施釉陶器の高台に類似する赤焼土器高台付坏等が散見でき、ST2等の赤焼土器坏を主とし須恵器の供膳形態が払拭される土器様相からも、掘立柱建物跡群とは明かに時期を大きく隔てる土器や遺構が存在する。これらを基として以下に奈良・平安時代の主だった遺構の変遷と年代観は、I期：SB5・6・131・SA8・132・SD47・49(8世紀後葉)、II期：SB1・10・16・SD41・43・SD46～51・78～81(8世紀後葉～末葉)、III期：SP91・SK11・SP65(8世紀末～9世紀中葉)、IV期：ST2・SX125・126(9世紀末～10世紀前半)に比定される。

本遺跡は上記のように少なくとも古墳時代前～中期には自然堤防(微高地)が整い集落が断続的に営まれる。調査区の主体である奈良・平安時代の遺構・遺物からは概ね8世紀後半が主体をなし、10世紀前半で廃絶し、9世紀後半段階での土器相が希薄である。これは高瀬川等が氾濫の要因の一つとして考えられ、集落が一時期移転、廃棄された結果と推測される。

土師器杯類 (IIA・IIB類)		須恵器杯類 (IIA・IIB類)		赤陶器杯類 (III A)	
有段 丸底	形態化する有段丸底	無段 風平底	無段 平底	口クロ ・体部下半ヘラケズリ、 無調整	口クロ ・無調整
IIA1b 17-11 北区北半	IIA1c 15-2 G-17	IIA1b 15-3 B-18	IIA1a 12-13. SB10EP5	IIA2 12-17 SA8EP4	IIA2 14-13 SP91
IIA1b 15-11 SP36	IIA1c 15-4 E-18	IIA1b 14-10 SP36	IIA2 12-19 SA17EP1	IIA2 13-11 SK55F1	IIA3 14-12 SP91
※1 河北町不動木遺跡SD1出土	※2 河北町不動木遺跡ST30出土	※3 河北町不動木遺跡SD1出土	※4 河北町不動木遺跡SD1出土	※5 河北町不動木遺跡SD1出土	※6 河北町不動木遺跡SD1出土
IA1 13-13 SK31	IA1b 17-14 北区東トレ	IA2a 15-6 E-10	IB1a 12-15 SB10EP3 (SK12)	IA3a 17-15 北区北半	IB2 13-8 SK11
IA1b 15-8 C-6	IA1b 15-10 C-6	IA3b 15-10 C-6	IA3a 17-15 北区北半	IB2 13-8 SK11	IB2 13-8 SK11
※1～3は「不動木遺跡発掘調査報告書」 山形県教育委員会(1986)より転載		※4～6は「不動木遺跡出土杯類分類図」 添山長泰著		10cm (1:4)	

第18図 出土杯類分類図

2. 漆山長表遺跡における「国分寺下層式」期の土器群について

本調査で特記するものとして、所謂「国分寺下層式」期の土師器が破片資料ながら散見でき、山形盆地では出土例が少ない当該期の資料が得られた。しかし、出土状況は遺構に伴うものがほとんどなく、必然的に土器の一括性や組成を判断できる資料も少ない。以下に土師器坏類を中心に各種別の坏類の形態的変化や周辺遺跡との比較から土器の組成や年代観を概括する。

本遺跡の「国分寺下層式」期の土器は2種類に大別できる。一つは「有段丸底」の外面底部と口縁部の境に、明瞭な段(II A1b類)や軽い段(II A1c類)、微弱な沈線で画するもの(II A1a類)を有する一群である。一つは「無段」杯で、外面口縁部を横ナデ後ヘラミガキで仕上げ、境より体部下半をヘラケズリし、口縁部から体部が内湾し、身がやや浅い丸底風の平底を呈するであろう一群(II A2類)と外面体部下半を手持ちヘラケズリを施し内面黒色化する平底で椀状を呈する一群(II A3類)である。これら土器群は河北町不動木遺跡でも散見され、SD 1溝跡からはII A1・II A3類が供伴する。年代的に宮城県名取市清水遺跡の資料から「大きく国分寺下層式期の終末、実年代では8世紀末、奈良時代後半の土器群」として取らえている。

しかし、本調査では出土した土器群の形態的相違から幾つかの段階がある事が考えられた。例えば、前者「有段丸底」の一群は、より前代の形態を引き継ぎ、一般的な「有段から無段」・「丸底から平底」という変遷から、後者の一群に先行する形態であるといえる。また、前者の中でも明瞭な段から形骸化する段への形態変化が窺え、II A1a類が「有段丸底」の一群の終末的様相を持つと判断される。一方、後者の土器群にもII A3類のように概して外面調整を同じくするが、平底で椀状を呈する形態的相違から、「丸底風平底で身のやや浅い」一群よりも後出の底部形態を示すと考えられる。このロクロ未使用「国分寺下層式」期の段階に後続する土器形態としてはロクロ使用のII A4類の椀状を呈する坏が上げられる。体部下半の回転ヘラケズリを施す黒色土師器坏の出現から8世紀末から9世紀初頭の時期が考えられる。

上記の調査で出土した「国分寺下層式」期の土師器杯類の変遷と年代観を概括すれば、ロクロ未使用の「国分寺下層式」期は成形技法の変化から、ロクロ使用の内黒土師器の年代を超える事はないと推定される。すなわち8世紀後半を主体とする前後する時期が判断できる。その中でも主体的なII A1類とII A2・3類は前述の通り形態的特徴から段階的な変遷を追う事が可能であった。「有段丸底」II A1類は8世紀後半でも古い方、つまり8世紀中葉から後葉と推測される。「無段丸底風平底」II A2類や「無段平底」II A3類はやや後出の8世紀後葉から末葉の時期と判断され、次のロクロ使用の黒色土師器の段階に移行すると考えられる。

他の同時期の坏類を概観すれば、須恵器坏類は特徴的なものに底部「静止糸切り」・「回転糸切り」の後、底部に回転ヘラケズリを施すIA1類が散見できる。底部調整と形態的特徴は多賀城市山王遺跡のSD180の須恵器坏類に主体的に表れ、漆紙文書等から8世紀前～中葉頃の年代観が当てられる。また、主体的に見られる底部切り離しヘラ切りの坏類にも形態的変遷が認められ、逆台形を呈し底部がやや小径化するIA2類から、更に底部が縮少し、糸切り形態とも類似するIA3類への推移が窺える。IA3類と同形でヘラ切りの赤焼土器坏III A2も出現する。時期的には8世紀後葉～9世紀初頭が当てられる。

報告書抄録

ふりがな	うるしやまながおもてはっくつちょうさほうこくしょ							
書名	漆山長表遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第58集							
編集者名	植松暁彦・高柳健一							
編集機関	財団法人 山形県埋蔵文化財センター							
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コ ー ド		北 緯	東 經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うるしやまながおもて 漆 山長 表	やまがたけん 山形県 やまがた し 山形市 おおあざあおやぎ 大字青柳	6201	平成8年度 登録	38度 18分 6秒	140度 21分 18秒	19970507 ～ 19970626	2,800	主要地方道 山形天童線 地方特定道 路整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項		
漆山長表	集落跡	古墳時代 奈良・平安時代	竪穴住居跡 1軒 竪穴住居跡 1軒 掘立柱建物跡 7棟	土師器(高坏・甕) 土師器(坏・高台付坏・ 甕) 須恵器(坏・高台付坏・ 蓋・壺・甕・ 横瓶・硯) 赤焼土器(坏・高台付坏 ・甕)	20箱	高瀬川右岸の自然堤 防上に立地する古墳 時代前期と奈良・平 安時代の集落跡。 山形盆地では検出例 の少ない「国分寺下 層式」期の土器が出 土。		

図 版



遺跡遠景（北から）



遺跡近景

図版2



SB1完掘状況（南から）



SB1検出状況（北から）



SB1EP5土層断面（南から）



SB1EP4遺物出土状況（南から）



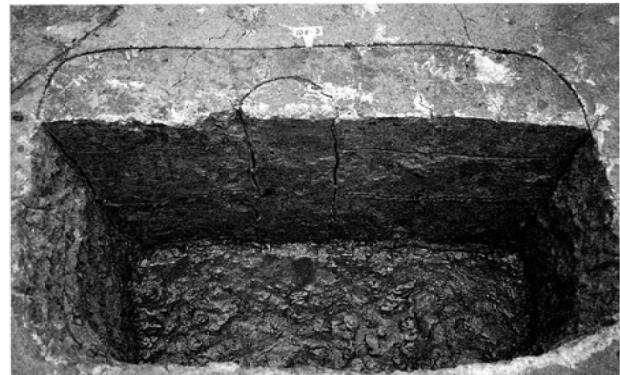
SB1EP1完掘状況（南から）



SB5・10完掘状況（北から）



SB5・10検出状況（南から）



SB5EP8土層断面（南から）



SB10EP12土層断面（西から）



SB5EP3・SB10EP9完掘状況（西から）

図版4



SB6完掘状況（南から）



SB6EP3土層断面（東から）



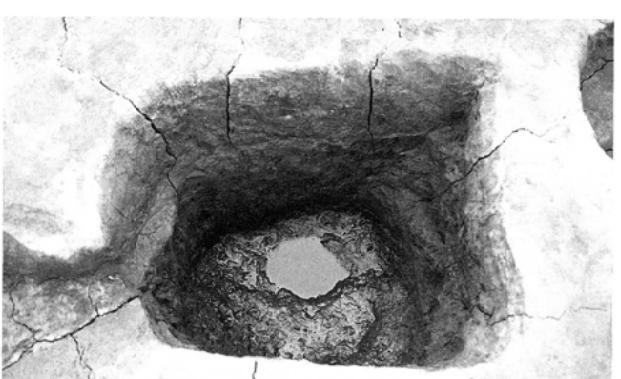
SB16完掘状況（西から）



SB16EP3土層断面（西から）



SB131完掘状況（南から）



SB131EP59完掘状況（東から）



SB124完掘状況（南から）



SA132完掘状況（南から）



ST3完掘状況（南から）



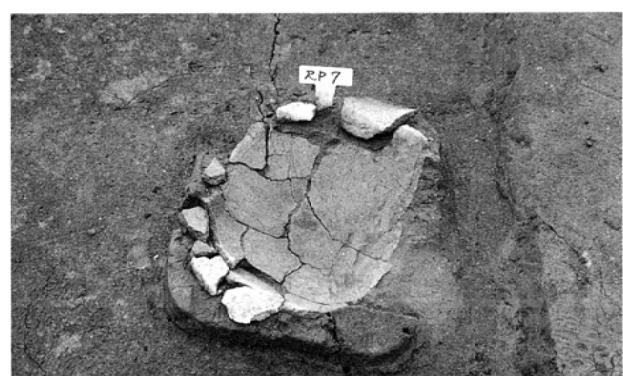
ST3検出状況（南から）



ST3土層断面（南から）



ST3西EL土層断面（南から）



ST3遺物出土状況（東から）

図版6



ST2完掘状況（南から）



ST2検出状況（東から）



ST2土層断面（南西より）



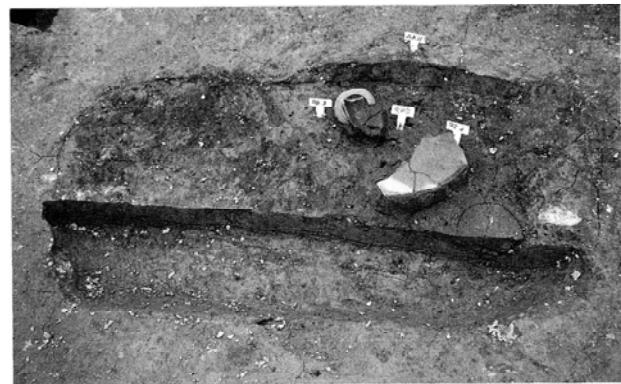
ST2EL土層断面（東から）



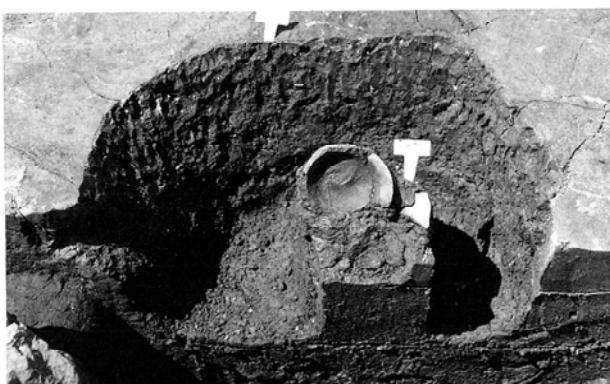
ST2EK1完掘状況（南から）



III層上面遺物出土状況（西から）



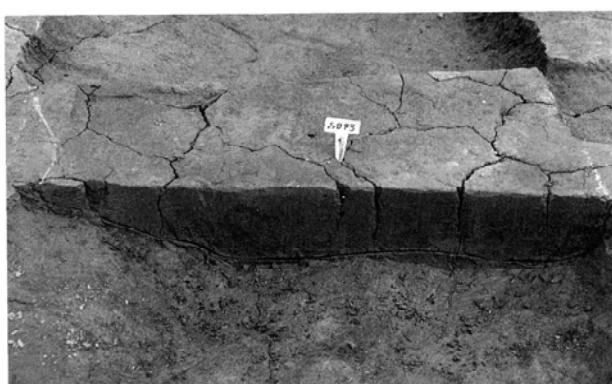
SK11遺物出土状況（西から）



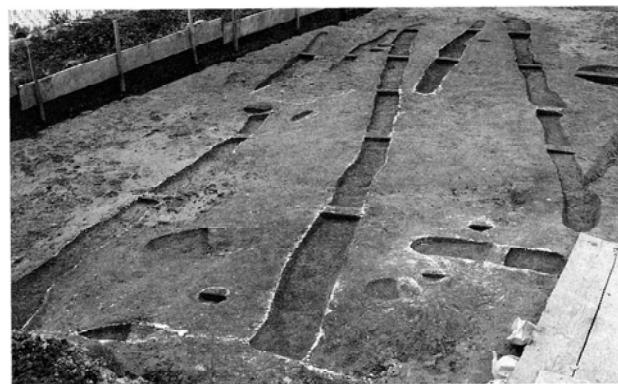
SK55遺物出土状況（南から）



SD43完掘状況（北から）



SD43土層断面（北から）



SD46-SD51完掘状況（南から）

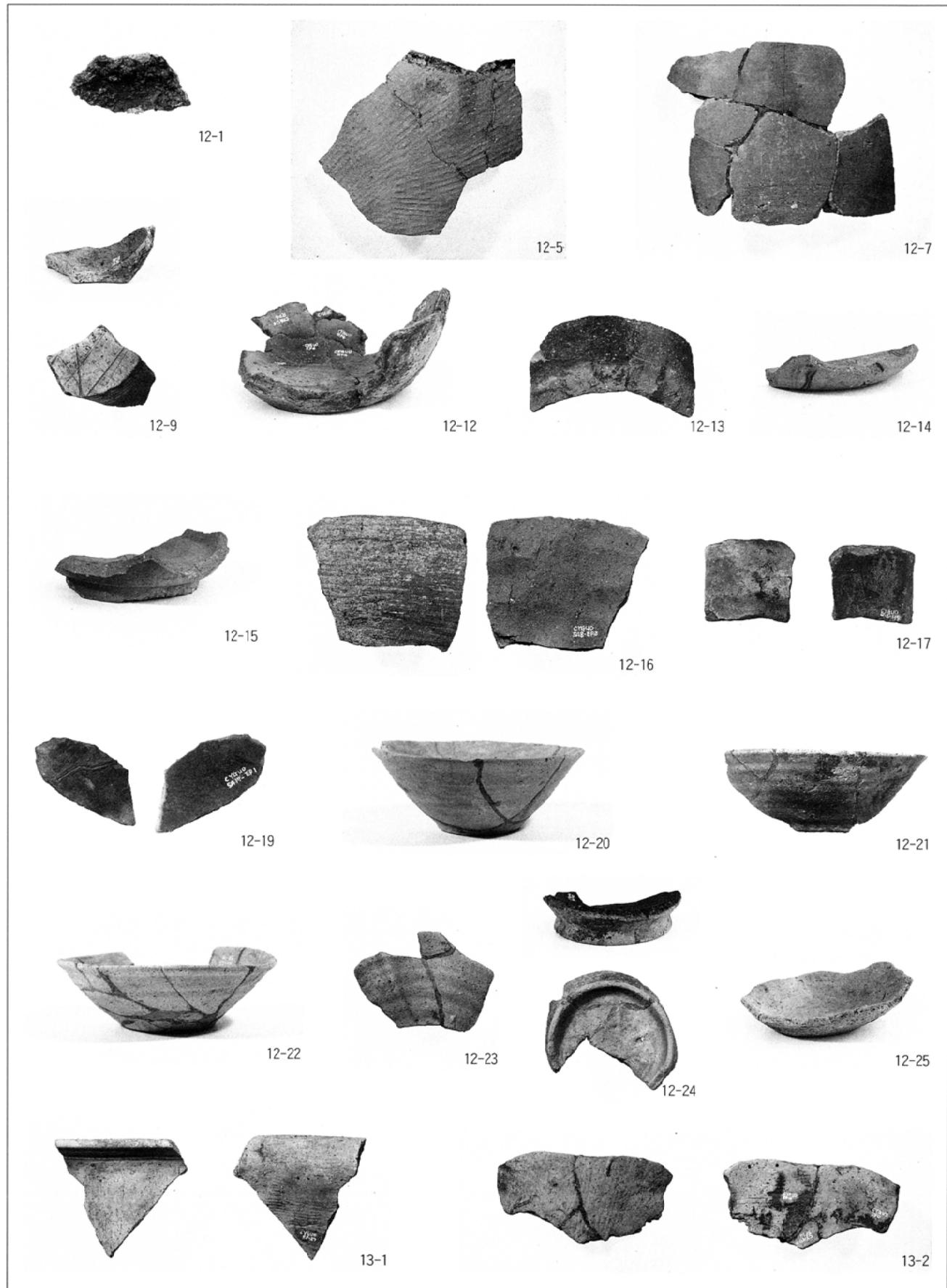


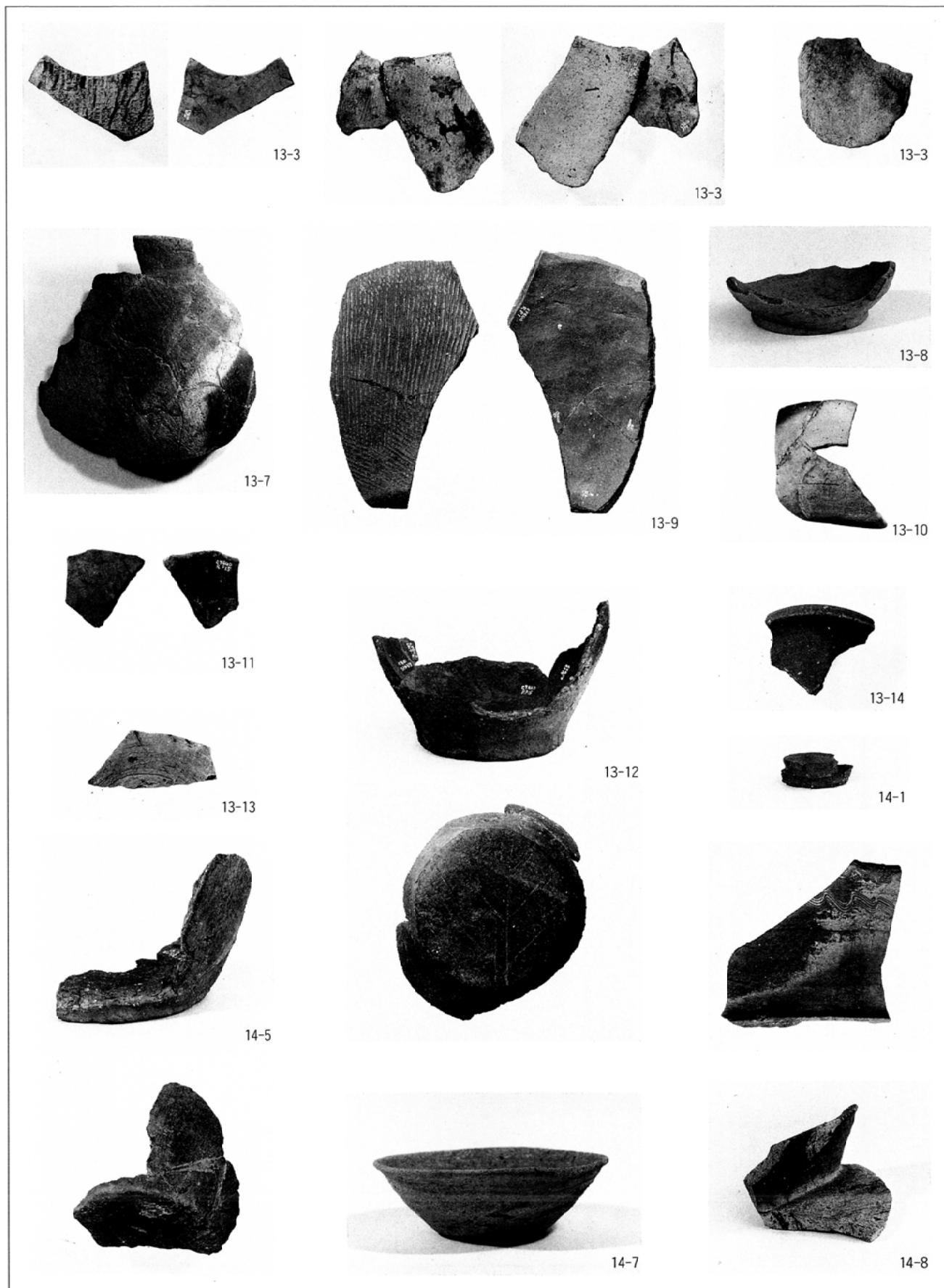
北トレンチ、土層断面（南東から）



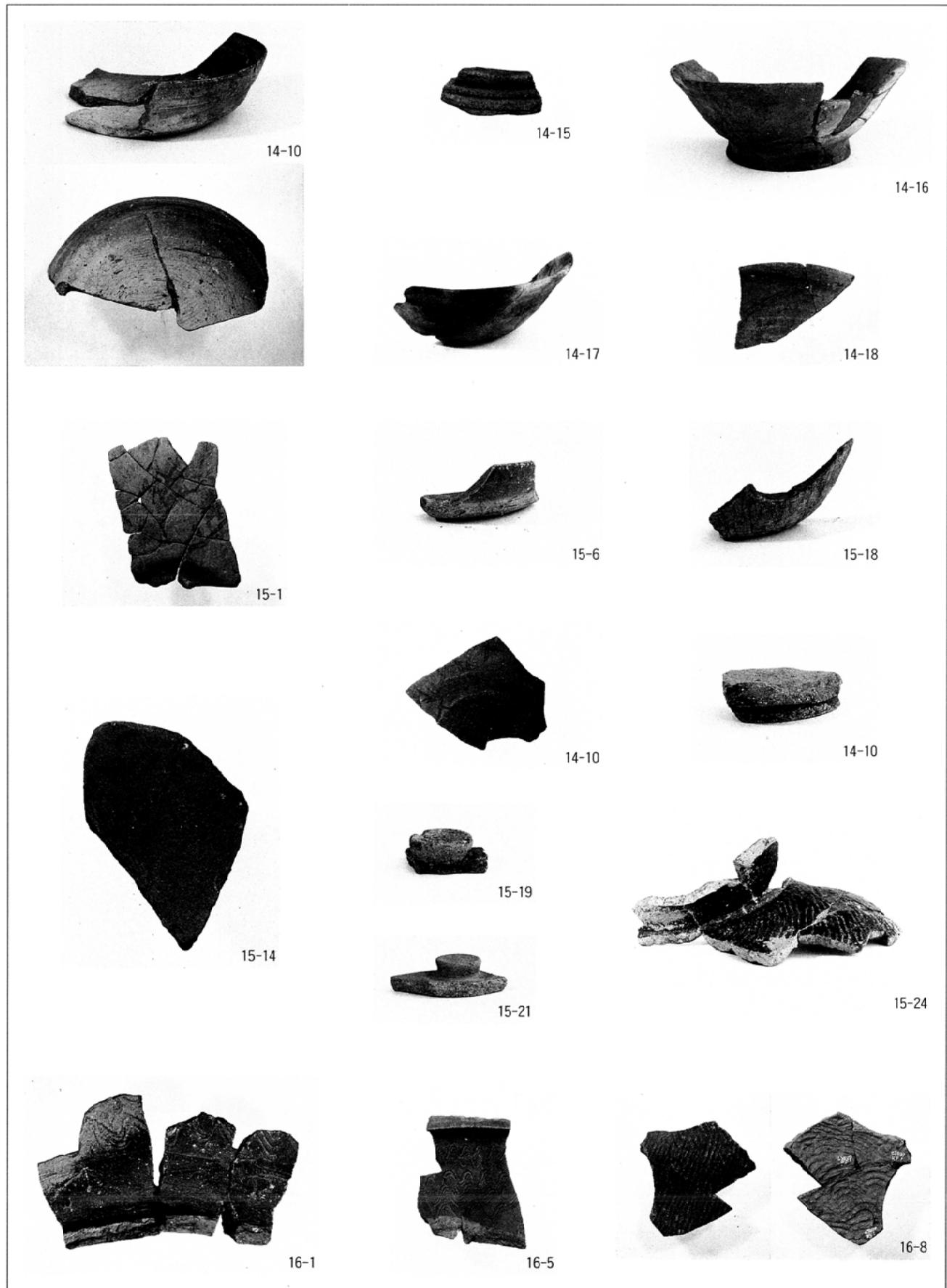
南トレンチ、土層断面（南東から）

図版8

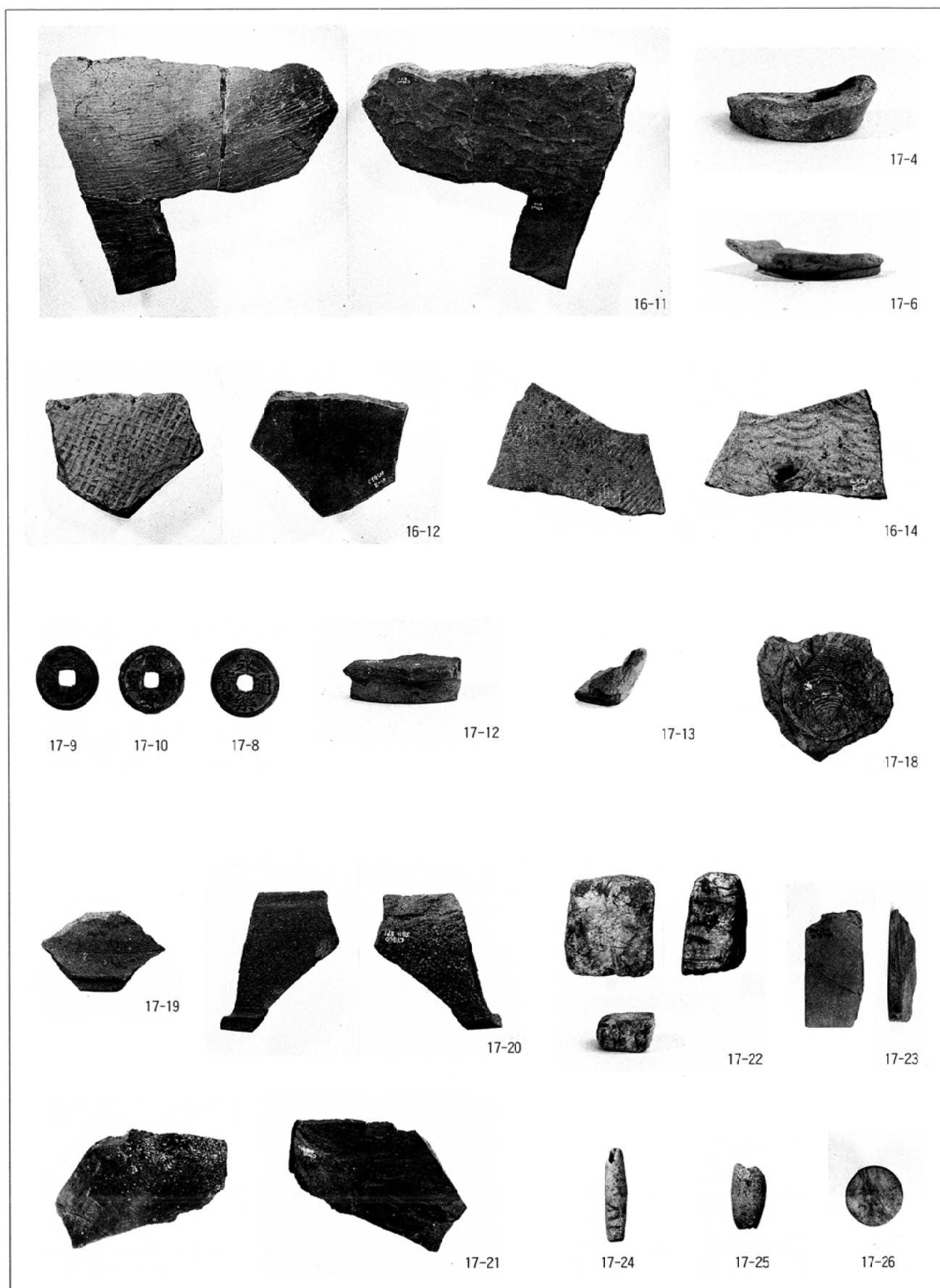




図版10



図版11



付 編

漆山長表遺跡 理科学的試料分析業務報告（抜粋）

パリノ・サーヴェイ株式会社

山形市漆山長表遺跡の竪穴式住居跡で確認された貯蔵穴や甕の内容物に関する情報を得るために、自然科学分析調査を実施した。このうち、栽培植物に関しては花粉分析と植物珪酸体分析、動物遺体の有無に関してはリン分析を選択した。

1. 試料

調査対象は、竪穴住居跡(ST 2)の貯蔵穴および竪穴住居跡(ST 3)内に認められた土器甕(RP 7)である。ST 2では、貯蔵穴覆土が1点採取された。ST 3からの試料はRP 7覆土が1点採取された。分析試料はこれら2点であり、同一試料を各分析項目で分割して用いた。

2. 結果

(1) 花粉化石の産状

花粉化石はいずれの試料からもほとんど検出されない。僅かに検出される花粉化石は外膜が溶けて薄くなっていたり、また壊れていったりする。検出される種類も少なく、木本花粉のマツ属・サワグルミ属・ブナ属、草本花粉のイネ科・アカザ科・ナデシコ科・ヨモギ属・他のキク亜科、シダ類胞子の合計9種類である。

(2) 植物珪酸体の産状

植物珪酸体は両試料から検出されるが、保存状態は悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が見られるものが多い。また、ST 3内のRP 7試料では特に検出個数が少ない。

ST 2内の貯蔵穴試料では、栽培植物のイネ属が認められ、この中には短細胞列として認められる細胞片もある。他に、タケ亜科、ヨシ属、ウシクサ属などが認められ、この中ではウシクサ属の産出が目立つ。

ST 3内のRP 7試料では、イネ属の機動細胞珪酸体が僅かに認められるが、ST 2とは異なり組織片は全く認められない。ウシクサ属の産出が目立ち、タケ亜科やヨシ属も認められる。

(3) リン酸含量

ST 2内の貯蔵穴覆土試料の土質は軽埴土、土色は10YR1.7/1黒色、ST 3内の甕RP 7覆土の土質は埴壤土、土色は10YR3/1黒褐色である。両試料のリン酸含量は $1.0\text{ P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 未満であり、通常土壤に含有されるリン酸量としては低い値である。

3. 考察

(1) ST 2 内貯蔵穴に関する検討

栽培植物のイネ属の葉部に由来する植物珪酸体が認められ、この中には短細胞列という組織片の形で認められるものもあった。今回の組織片の検出は、貯蔵穴内にイネ属の植物体、すなわちイナワラが存在したことが窺えるが、組織片の産状から多くはなさそうである。

(2) ST 3 内の RP 7 内容物に関する検討

リン酸含量が低いことから、埋没した時点で甕内に植物質あるいは動物質の内容物が存在していた可能性は考えにくい。

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第58集

漆山長表遺跡発掘調査報告書

1998年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 023-672-5301
印刷 田宮印刷株式会社
